海國兵談第十三巻

操練

仙臺　林子平述

操練（ソウレン）とハ軍を出ス時ハ云ニ不及、太平の時ニも人馬ニ軍の仕形を教置事也、異國ニてハ周ニ是を治兵ト云、唐ニ教旗ト云、明ニ操練ト云、皆同事也

日本の古ハ都ニ鼓吹司（クスイシ）を置、國ゝニハ軍團（タン）を置て軍事を教し事史書ニ見ユ、其外犬追物、牛追物、又ハ戯（ケ）道なとゝ云事も操練教旗の心持也、孔子モ以㆓不㆑教民戦、是謂㆓棄

之ト宜リ然ルニ近世　日本ニ操練の事絶なし
て危シト云ベし其故ハ弓馬鎗刀の小武藝なし
てとも稽古せざれバ其一藝も不取廻（トロシ）すなもれ
之況ヤ天下今日の大武藝を稽古なしニ働か
事ハ不吟味ニ至るはべし大将なは人能く思
惟はるべし異國ニてハ末世ニなりても能操
練を致スト見へなり其證據ハ大閤の朝鮮征
伐ハ明ノ萬暦中ニて其國數十年太平續（ツヾキ）なは
時なれども明（ミン）より朝鮮江加勢ニ來シ軍勢ど

も其動止（トウシ）驅（カケ）引（ヒキ）甚自在ニして一身を使（ツカ）ウか如
シとて　日本の諸将太ニ驚かれなりし又近
世、明和の頃、唐（カラ）山福州江漂流して三年ニして
日本江帰りなる者こしの物語を聞シニ南京
省ニ逗留の間、軍の稽古を度々見なりと云り
今の清も康煕以來百余年の静謐ニして其上、
南京省ハ京師を去事四十日路の邊鄙（ヘンヒ）なれこ
も右の如ク軍事を不棄（ステ）事手ぬるき政ニして
可羨事ニとも云へ扱　日本の軍ハ操練もなく

軍法も錬なり、只國土自然の英氣にまかせて其鉾（ホコ）先鋭（スルド）なるはのみ、ハ唐山は兵に接戰せず一且ハ勝利（カチ）を得（ウル）とも久しく戰て位詰（ヅメ）に逢バ軍法嚴重（ケンヂウ）ならざるゆへ必瓦解（シゼンニクヅレ）して壞ルへし兵を用ル者此所を能會得して操練軍法忽にせば事勿レ操練の仕形ハ左に大畧を記ス猶廣ク考て教へし但し細なる事に不泥大筋（スヂ）をゐへし加に教へし

○操練をなすにハまた操練をすべき場所を設へし大聚大なるハ方六七里（六丁野ヽ）一小なるハ方凡五町、十町許なれバ一國ハ大小人數の多寡に随へし是を大馬場ト云但し此大馬場ハ惣人數を集（アツメ）て大操練（ソウレン）をする所なれバ一年に二度致スべし（二月 八月）其余ハ小操練なれバ末巻に圖を以大学校（カクカウ）の内にて教べし其教法も末巻に記セリ

○第一八巻目に云ル所ハ押前陣取の次第、亦ハ野陣の張様なとを教へし

○次に惣軍兵陣屋に居時陣觸の趣を操練せ

べし其牡形、薄板（ウスイタ）江明幾日、何れ刻、何方江出陣ト書、但出陣の宛（アテ）所を除ク事もある 但此札を三尺計（バカリ）の竹ニ挟（ハサ）ミて昇（ノボリ）の如クもた之右れ昇を本大将より一札を三人宛（ツヽ）ニ持せて番頭江遣ス之 但番頭七組あらバ右の札を七枚拵て一頭江一札ずゝ遣ス之 勿論使の者直ニ番頭江對面して相渡し扣（ヒカヘ）居あり其時番頭自筆ニて姓名承ルト書て別ニ使者を仕立て手下の百人頭江遣ス之 其時百人頭自筆ニて書付ル事上の如し 但百人頭幾人ありとも番頭の使者持廻ルべし 段々持廻て打止（トメ）の百人頭よりてし持帰て大将の使者江返スべし 大将の使者是を持帰て直ニ大将軍江納ムべし 扨百人頭より各右れ札を写し取て手下の小組頭共を呼集て右れ札を見せて其札江受（ウケ）書をかさしむべし 小組頭より又其札を写て持帰り手下の首立五人を呼集て右れ札を借（カシ）与べし 五人れ首立右れ札を借（カリ）帰て面々の組合四人の軍士共

に見せて其札に各爪判を取て右の札を小組頭江返スへし如此なしなば百万人の軍士ト云ども一く受判を取て各〳〵に知らせらるへし

○次に貝の吹様を教へし其法一番貝を起シ之起て飯の用意をへし二番貝ハ支度之身堅をへし三番貝を掛之出て陣門に掛て大将の出ルを待へし扱貝に種々の吹様有て其法繁（ハン）多（ケタ）なれども戦場の騒（サハカシ）き中にて細（コマカ）なる相圖ハ聞分難ク却て聞違（チガイ）の端トなる事をしるへき之然ル故に只貝を貝トをかり定べし但シ急（ニハカ）長（ナカ）の二通りに吹分ル事ハしるへきなれ但出陣に貝揶子木（ヒヤウシキ）等の鳴（ナリ）物を一向に禁ぜて、ひそかに出陣せし事もあり此躰も又操練しるへし

○次に太鼓の作法を教へし其法敵間四五町より二三十間に詰ル迄を緩（ユルリ）打之へ大既太鼓一數に一歩（アユミ）[illegible]法なるへし扱敵間二三十間

ニ譜(ツーリ)てハ双方睨(ニラミ)合て武聞(モノアイ)語リ畢ルもれハ其時ら居敷(ヲリシキ)て弓鉄炮を連發(ツルヘウチ)、大鼓をバ一ト拍子れ頭附(カレラヅケ)を打て早太鼓ヲ直やそ士卒無二無三ヲ矢畑(ヤケブリ)の下より敵隊江飛込ハ軍法れ巻ヲも云如ク頭附(カレラヅケ)の太鼓を聞ても進ざる者をハ其頭、並ヲ鑑軍(ノツケ)、能見覚て言上レ戦済(スミ)て後斬(キリ)て棄へ志（但シ馬上太鼓ナルベシ、鞍ノ左ノ居木(イキ)ガキ江太鼓ヲ、立ニ結付テ馬上ニテ打之）

○次ヲ押行躰を敎へど然ながら押前ハ人数の多寡、土地の険易ヲ因て次第不同なるものなれも一緊ニハ言難シ只ハ行列を不乱事ト大小便を便(ベン)シ草鞋(ワラヂ)等を著替ル等の荒増を敎へき〻（此仕形ハ一騎前ニ記セリ）

○次ニ押行道中ニて敵ニ出會める時れ働を敎へし惣して押行一路(ミチスガラ)も前後左右の物見を用へし扨東れ方ニ敵ありト物見より注進あらバ旗本ニて金を鳴(ナラシ)て押行人数を止ルなり其時惣人數居敷て旗本れ下知を待テ敵の有無を諸軍江通せはなる前ニ記ス如ク旗を

用ル之ハ其仕形は第七巻目に云ル所の趣を教
へし扨居敷て旗本の下知を待て敵を懸ル定
法なれども敵勢、無二無三に突懸（ツキ）らば旗本の
下知を待に不及其出會（アイ）ある備、直に取合て合
戦ふべし尤遊軍、後口（ウシ）を詰ル弘横を入ル外為（ス）
べし他の備ハ妄りに動揺せず各方角に向て
居敷（オリシキ井）居て旗本の下知を待べし下知なき前に
少も動事勿し
○次に押行道中に両方より敵の見ユル躰を
教べし三方四方皆同然之ハ
○次に押行人数を金を鳴て押止ル事を教へ
し其法、先旗本の足を止て金を鳴ス（ナラ）時は先陣
は行過、後陣ハ押懸（オシカヽリ）て難儀に及ブ之ハ此故に人
数を押止ンとせる時は押行なから金を五鼓
打へし其時諸手も金を鳴して應（オウ）そは之へ鐘（カネ）を
打法は一呼吸（ヒトイキ）に一鼓（コヘ）打へし扨六鼓目に旗本
の足を止メ其外も聞付次第足を止ル時は先
陣行過ル事なく後陣押懸ル事なくして行列

調（トヽノウ）之

○次ニ敵味方備を押出して大拆（セリ）合の躰を敎へし其次第懸り口ニ六ツあり委ク陸戦の巻ニ出せり其趣を以て操練すべし就中大切の操練之

○次ニ敵を踏破（ヤブ）りて追行時の事を操練すべし是亦陸戦の巻ニあり

○次ニ味方敵ニ追立られぬる時、二れ見より横を入ル躰を操練すべし是亦陸戦の巻ニあり

○次ニ馬入れ躰を操練すべし馬入ニ二法あり是亦陸戦の巻ニあり

○次ニ敵より馬入をするを喰（クイ）止ル躰を操練すべし是亦陸戦の巻ニあり

○次ニ長柄備の立様を敎へし是亦陸戦の巻ニあり

○次ニ長柄備を破ル趣を敎へし是亦陸戦の巻ニあり

○次ニ大銃の打様、又大銃を放戦ニ用ル躰を
教へし二ツともニ陸戦の巻ニあり
○次ニ城攻の法を教へし就中、仕寄の態（ワザ）仕難
きもの之、能教へし委キ事ハ、城攻の巻ニあり就
中、居敷なから仕寄（ヨル）態を能教へし
○次ニ守城の諸法を教へし法ハ籠城の巻ニ
あり都て城攻籠城の二條ハ事多キ事なれバ
能心を賦（クバツ）て教へし
○馬を教ル事ハ十五巻目、馬の條下ニ詳之

右ハ外、術の持様、虚敗（ソラニゲ）の仕様等ハ簡次第
教へし猶此外ニ軍中の礼式あり閑暇の
時教へし都て軍の巧拙ハ此操練ニあり
忽ニすべき事勿レ　日本の軍ハ操練なか
き故無法の軍多し太閤の猛威ト云とも
朝鮮ニおいて明軍の堂々森々たるニ仰天
せらるゝ事あり此外和漢の軍立の精粗の
様子、諸軍記を見て知へし皆操練なけれバ
せざる所ニあり孔子の以ニ不教民戦是謂

稟之ト宣ル事能味(アヂハウ)へし扨只今大平の世の人ニ甲冑著(キセ)て奔走せしむる時ハ肩(カタ)を引レ身節(フシ)痛て一里も往来仕難キもれへ然ル故ニ操練の度毎ニ甲冑着(キセ)て終日奔走せしむる時ハ度(タビ)重て自然ト甲冑ニ馴ル故肩も引レズ身節も不痛足も重からず息も不切後ニハ二三月甲冑不脱(ヌカ)ごしもさのミ身躰も不疲もの也此所操練の妙なり能ミ心を用て敎へし然ルニ當時太平れ化を蒙ル世ニ居て此等の言を吐出ス事実ニ多罪之へ然ト云ごとも初より段ゝ云シ如ク　日本ハ海國ニて然も隣國多キ地勢なれども只外國の變の為ニ如此敎置べき事備(ビ)字の持前なるべし當世武備ト云事ハ人ゝ口ニ不絶(タヘ)言(イフ)事なれども皆虚談(キヨタン)(ウソ)ニして実用なし危(アヤウキ)の甚之武備ト云事を不知ニハ劣(オト)レリ可思

第十三終

海國兵談第十四巻

一　武士之本躰并知行割人數積（付）制度法令之大畧

武士の本躰ハ當世の百姓ト殊なる事なし其故を如何（イカ）にと云に古ハ武士ハ皆土着（イナカスマイ）なり其中にて土地を多ク持たる者ハ普代の家ハ子郎黨を多ク扶持シ軍陣に出ルにも郎黨ハ云に不及、百姓をも軍兵に仕立て召連たる故（五千石）五百貫（一万石）千貫の領主にても五百人も千人も出

しけるは事ニハ信濃の木曾、上野の新田、伯耆の名和、肥後の木山等皆土着の大身士ニて急ニ臨て軍兵を出しける所業人〻知所ニハ扨又小禄の武士ハ手自農作して作り取ニ志ける故ニ三貫の地を所持しても馬をも持、武具馬具等も違ひの心懸ニて事欠さる様ニ嗜る、ニハ農作なせる故手足ひゝけて丈夫ニハ鹿狩漁獵等を樂トなせる由ハ筋骨壯健ニハ遠方の親戚朋友ト往来なせるゆへ遠路ニ習て不疲、平日糲食短褐ニ口腹身躰を馳ス故軍陣ニ出ても此二ツニ不苦、大槩古代の武士ハ形勢、如此なるもの也

然ルニ近来天下一統ニ武士ハ城下ニ住居するものニ成りたり城下ニ群居せるゆへ自然ト衣服、飲食、家作等を美麗ニ致し、終ニ武の本躰を取失て、却て今ハ世ニ士の嗜ト云ハ衣食住ト立振舞、言葉遣の立派なるを専一トス、此如ク奢侈盛ニ成レ故、面〻軍用の為ニ蓄ル所の俸禄、皆衣食住ト婦人トニ費へて武用の為ハ

禄ある事を忘却（ホウキヤク）せり右の如ク雑用の奢侈（オゴリ）盛なる故へ困窮して武備を取失フ、ニ困窮して武備を取失フ事ハ屹度（キット）制度（セイド）の立ざる故へなりト知べし頗クハ制度を立て奢侈を禁じ武士を真の土着又ハ土着同様になして武術再興なるべき事一國一郡をも領せる人勤起すべき事ニ今の世にも古き諸侯に家中を土着させあるもあり近クハ吾藩（ワガバン）を始トして相馬、大村、肥前、薩州など如此なれども直参も多ク倍臣も多き〻可思く〻

○兵士を扱フ事ハ番頭物頭等の頭役の者を教ルごハ品替レり撰士の巻にも云如ク武頭（モノ）以上の輩江ハ人数をあづけて一方を任せ（イカ）なものなれバ学問有て才智もあらねバ文武の大畧を呑込て何國江押出（イタレ）ても獨（ヒトリ）道のなる様に取立べし軍士ハ頭々の下知を承て働クものなれバさいのミ学問も才智も入用なし只敵に當て勇壮（ユウソウ）なる所を専一ト教ユべし然ト云と

も多力（ツヨシ）なり非力（ヨハシ）なりて此に所謂（イハユル）勇壯とハ力量を云にハあらずし意氣の勇壯なるを云意氣を勇壯に為（ス）ル事ハ大將の方すなる事にして亦一二の術なり尤に其條々の大畧を記ス

○第一武士を土着にする心持なるへし土着それたゞ無骨（ブコツ）にして上﨟（ロウ）の風なく古代質朴の姿に返ルへし

○歳に五六度鷹野猪狩して武士の心氣を引立て沈欝せざる様に教置へし是術之

○制度を立て衣食住の費用を省き華侈の心生ぜざる様に教へし

○頭役に才智器量の人を用て組を教立へし

○大將ト諸士ト遠々敷てハ士の勵（ハゲミ）薄（ウス）きもの也是を親くせハ道も諸士の藝能を頭くより申立させて主君自ラ是を試々巧拙（ヨシアシ）に隨て夫々の褒賜（ホメツカハシ）なるへし尤學術なる者にも或ハ對策を書せ又ハ詩歌等作ラスへし

○城當番の大番衆などを急に召出て或ハ

弓馬鎗刀の藝を試ミ又は角力なとさせて楽
ミなから親ミを厚クせへし
○鷹野猪狩等に出ルにも外様士をも側近ク
召寄、時宜に随て勇力、早態等見分して意氣を
もけまゝべし
右は外上下親ミを厚クせは道幾計もな
るへし大将なる人心を用て上下親ミを
厚クすれは君臣合躰せる時ハ呉子か所謂百
姓皆是於吾君而非於隣國の風俗となる
へし如是ならハ戦て必勝守て必固から
も可勤
○知行割人數積の事、大畧を云へし異國にて
是を兵賦ト云兵賦トハ知行高を量て人數は
惣高を積り置事之人數の惣高を知さるハ軍
術の根本を忘却したる筋にて是亦一ツは失
政之扱兵賦の本法ト云ハ異國三代の時は井
田は法なれとも當時それ程にはなくとも知
行高を考て人數の惣高を預め計り置事、一國

一郡をも領スル人油断ある間敷事なりまた其軍士を扶持せずに三法あり然ト云ども合土着にあらされバ十分ニ行ヒ難キなり若本土着に為難（ナシカタク）ンば土着の真似（マチ）を致スべし、本土着ハ面々の知行所に住居せしむる故城下より五里十里百里二百里も隔（ヘダヽ）ル者あり、事不自由（コトフジユウ）なる様なれども面々に家中を多ク扶助せしむるなれバ是に勝（マサレ）ルハなし吾藩及ビ薩摩肥前など是なり、亦此真似（マ子）を致スにハ俸禄ハ知行なり

ども稟禄（クラマイ）なりとも、それに不拘（カヽハラズ）城下續の近在郷に大下屋敷（シモヤシキ）を一（ツ）渡しおきて住居せしむべし如此なれバ其屋敷に田圃（タンボ）を作て五人十人の家中ハ養ハるゝもの也此二ツは倍卒（マタモノ）を多ク出サせて軍士に充（アツ）べき為なり亦一ツは役人家柄等の外ハ悉ク十石十五石の小給（キウ）にして皆土着に為て是を給（キウ）人とも郷（コウ）士とも云て、各作り取にせる事なり是小身の直参を多クして倍卒無（ナシ）の人数組なり相馬、大村など

此法なり何レも軍士を多ク扶助せるの良法あり卜知へし扱倍卒なる人数組卜倍卒無の人數組卜の優劣を論せる時ハ小禄の直参組をも善卜せる事なり其故ハ何程節制宜き人数組なりとも面々の倍卒を取集ル時ハ何卜なく正整せざる所なり、亦倍卒無の直参組ハ稀一手にして給ハならざるゆへ懸引も仕易きものなり卜云り此ゆへに小給の直参組、優レりと知べし

○右の如ク給人郷士を十石、十四五石にして國中に土着せしむへし扱國の大小に随て支（アヅメ）城又ハ居館等、幾ヶ所をなるへし其支城居館等に近き給人をも其所の城附（ヅキ）に定て其支配頭にも其城を預ヶ置、人を用へし

○右の如ク家士をも在郷給人に仕附ルとも大禄ノ歴々をも本城下に住居せしめて第一、學校に出精させて文武及ヒ國事を習（ナラハ）スへし尤在郷給人の頭にも別の諸役人にも此輩を用

ル事なれど在郷江ハ遣難シ然ル故ニ在郷江ハ百人頭小組頭を遣シ置て組ル諸事を世話致サせしむべし

○在郷給人ハ本城下ニ居（ヲル）我〻れ支配頭を詰見覺殊ニ其纏（マトイ）馬印等を詰〻心得居ルべし是を覺ル様ニも成事ハ操練ニ依る之

○士ニ大禄を與（アトフル）ル事ハ其禄ニ應シて普代れ家の子郎黨を扶持せしめて軍役を勤（ツトメ）させべき為なり然ルニ當世れ如ク武士城下ニ在て奢侈を勤ル時ハ上ニ云如ク俸禄皆衣食住の雜費ト成て家の子郎黨を扶持せる事ならぬハ必ず成程ハ若黨中間を召抱て軍役の頭（アタマ）數（カズ）を揃るアト覺ル人も間（マ）〻有之とあれとも一季二季の渡り者等ハ先途（セント）の用ニ立者ハ十ニ一二なるべし然ル時ハ一二三百石より乃至（ナイシ）五百石千石れ輩（トモガラ）ハありとも一季二季の渡り者を召使（ツカウ）人ハ大切れ場（バ）ニ至ラバ其渡り者大半ハ落失て終ニ主人一人ト成べし是を以て考レバ士ニ

大禄を與(アタフ)ルも益なき事は第一なれども三十石以上は士の禄を皆減少(ヘラシ)して推並(オシナヘ)て三十石づつにせし御時は與(アタフ)ル所の俸禄、皆軍役の用に立べし其わけは三百石取は士に欠落(カケオチ)させさる家人十人召連(メシツレ)ヨト云フとも今風の城下詰にては決して不相成事ゝへながら物ずきなる渡り者一両人附纏(マトフ)とも主人ともに僅カ二三人也又一人前は禄を三十石ずつにせる時は十人にて三百石、是三百石の知行を出ス代りになしたる御軍士十人用ひらるゝへ是を以て考レば士に三十石以上の禄を與ルも只捨(スツ)ルに似るなり然ト云とも数代與(アタヘ)来ル所の奉禄を急に減少せば御事第一、人情に背(ソムイ)て暴悪(ホウアク)の名を蒙ルべし、ながら仕終(シオホセ)なる御所、人数口、今より二三十倍にも成事なれば知行割、住所割、組割等以ての外の騒動、且此騒動のみならず人情驚怨て足下(モト)より大変出(イツル)事疑なし扨又此大変騒動を恐レて其儘指置時は、いかなる俸禄悉ク

諸士の雑費に成て一万人扶持もすべき知行にて僅五七百人ならでは扶持せられぬは惜べき、の第一は如何して私俸禄も不費軍士も不足せしば騒動をも不生の術はあるべきや、竊に憶ふに制度を正くし、法令を厳にし倹約を専にして奢侈を抑世の中は華美を打反て淳朴の風となし人々業を励み利を勧ル事を教て諸士をして富しむべし諸士富るは時、能教諭して面々の禄に應して家の子郎黨を扶持せる術

を厳重ニ命令せしむべし其命令行届て下に述ル割合は心持に家の子郎黨を扶持せる時ハ一万人扶持をすべき割合の知行にて無相違一万人扶持せらるゝは此處を能呑込て古今の形勢を考合セ損益して工夫を附ル時ハ當世華奢にして且無頼なる世の中をも古代木訥の風に復して其上に當世の文華を加へなば諸士直にして怜俐に実義にして武藝学問を専トすべし、如此命令行届なば俸禄モ不費騒動も不生

軍役も不足せずして武術勃起せずし口ハ事を急に計ル時ゟ変生スるハ三十年を期トして改革をへし是大政を施ス大法と思べし扱土着の様子を不知人ゟ家の子郎黨の扶持仕様、不按内になるべきなれど其仕形の大略をたに述て考に備ルものなり

○近世諸士の風俗ゟ妻を持者ゟハ嫡子耳に志て二男三男等ハ皆他家の養子ト成て父母の家に住せずし扱父母の家にても二男三男等をせず他家を継(ツガ)せて已レハ別に奴婢を召抱て使(ツカイ)ものトせるハ此故に骨肉の親(シタシミ)ゟ目を遂て薄(ウス)ク成行、主従の間ゟ出替り者故、行儀のことに志て親(シタシミ)ゟト、古代の風俗ゟ二男三男等も皆父母の家に在て婢(ケンフ僕)の如ク家業を助て働き年長ずれバ妻を持て父母嫡子を助て家業を営(イトナム)故父母の家にハ別に奴婢を召抱ル事なくして人足レり若クハ富家にして奴婢を召使も多クハ夫婦者にして召使ふ者故其子弟皆一

家の内に在て上下長少肩（カタ）を並て成長すれは故其親（シタシミ）日々に厚く親厚き故軍陣に臨ても互に危を不見捨（ステ）一塊（カタマリ）に成て進退も揃故其働甚強し是天道自然の人情にして教を不待（マツ）所也是家の子郎黨を扶持する根本の大趣意也扨又主人心懸能て家の子を二三十人以上も扶持しるには一庖廚（ヒトツダイドコロ）にては賄（マカナイ）難き故面々に屋敷を與（アタヘ）又夫々に知行を取せて扶持する也他郷は不知吾藩の諸陪臣（マタモノ）の知行ト云ものハ悉く作り取にして足軽ゟ二三四十文（三四斗へ）より百文（二石へ）位迄也足軽以上も大畧二三百文（二三石）より一二三貫（二三十石）迄也此故に一二百石取の士も大方ハ普代の家中を十人も二三十人も持つ況や大禄をや是吾藩の大法ハ此割合を以て考れは一万石の知行を所持する陪人ゟ半分家中江與（アタフ）れて千人内外（ウチソト）ハ心易く扶持せらるゝにハ一（一万石の半分五千石之一）人前二石五斗の地を作取に與しても（五千石ニテ二千人扶持せらるゝ）扨身廻（ミノマハリ）の武具兵器等ハ主人よりの支度なれハ一騎馬を

飼(カフ)事も田舎に住して野草にて飼立ル故物入事なけれハ此故に主人ゝゝの心懸次第にて一万石取(トル)者も騎馬の二十も五十も出(ダサ)るゝ此積(ツモリ)を以て推(オス)時ハ（四五十石）四五貫文取(トル)士も家の子一両人扶持せる事相成へし是皆土着にゆゑされバ致難キ次第なり當世の如ク城下に群居して奢(オゴリ)侈を盛にする時ハ各一年の物成半年にも用イ足さる故、家の子抔を扶持せる事ハ思イもよらさる事と知へし因て憶フ武術再興せんと思フ武将ハ家中の大身士の知行替(カヘ)と云事を止て永代其地を領せしめ面々の家の子をも土着させて人数を多クもたる政を施し木訥の風を興スへき事武政の根本也尤な人数積、知行割の大略を記ス猶損益斟酌あるべし

○（二十石）二貫文以下単騎(ヒトリ)にて無異儀但し家の子を扶持しても戦場江召連ル事多少勝手次第なるへし

○馬ハ自國にてハ（五十石）五貫文以上自分馬、

他國江働クトキハ近隣ハ十貫文（百石之）以上自分馬遠國ヘハ三十貫文（三百石之）以上自分馬あり其余ハ惣ノ借馬なる

○四貫文（四十石之）上下二人（但シ草履取ハ無用ノ者ニ鎗持カ若黨ヲ召連ベシ）

○五貫文（五十石之）上下二人自身ハ駄馬（口取草履取無用ニ鎗持カ若黨ナルヘシ）

○六貫文（六十石之）下部二人自身ハ駄馬（右同断但シ鎗持二人ハ不苦）

○七八貫（七八十石之）の者同三人自身ハ駄馬（右同断但鎗持三人不レ苦）

○九貫十貫（百石）の者同四人自身駄馬（右同断）

○十五貫文同七人自身駄馬一（人前二百文宛与テ七人ニテ二）〆百文あり

一二人前三百文宛与ヘテ二十人ニテ六貫文ニ作ル

○二十貫文同九人自身駄馬

○三十貫文十人馬上二駄（一駄ハ子ナリ𪜈家来ナリ𪜈乗ルヘシ）

○四十貫文十五人馬上二駄（同断）

○五十貫文（五百石之）二十人馬上三駄（一人前五百文宛与テ三十人ニテ十五〆文之）

○六十貫二十五人馬上三駄

○七十貫三十人馬上四駄

○八十貫四十人馬上四駄

○九十貫五十人馬上五駄

○一百貫（千石ヽ）六十人馬上七駄（一人前三百文宛与テ六十人ニテ十八メ文ナリ）

○二百貫百三十人馬上十二駄

○三百貫二百人馬上十六駄

○四百貫二百五十人馬上三十駄

○五百貫（五千石ヽ）四百人馬上二十五駄（一人前三百文宛与テ四百人ニテ百二十貫ヽ）

○千貫（二万石ヽ）八百人馬上五十駄（一人前三百文宛与テ八百人ニテ二百四十メ文ナリ）

自國の軍役、右の割を以て人頭を悉（ツクシ）て出スべし遠國江働ニハ大遠、小遠の算（サン）あり

大畧ハ二十里ニ一割引ハ内外（ウチソト）なるへし扱此法ヲ施ニハ倹を教ル事第一なれハ先制度（セイド）を立法、令を嚴ニして奢（オコリ）を抑（オサユ）へし其法百貫（千石）も領スる者の朝暮の営（イトナミ）ハ當時の十貫（百石）程の営ニ准スへし兎角費（ツイヘ）の出ル所ハ衣（キルモノ）、食、住ト婦人より起ルものなれハ、まツ第一ニ此四のものゝ制度を立て其上ニ法令を嚴ニ下シ違背（イハイ）の者をゆるさズ定メの通り仕置（シオキ）せへし是亦一不按内の

者の為ニ制度の大畧を下ニ記ス也然レども目當なしニハ云難キ故假ニ五六十万石の國の目當を以て書スト云ども是は制度の極畧を記して其趣を知しむるのミ実ニ制度を立ルニ至てハ能〻考索して一物一事悉ク制度あるへし抑制度ハ奢を防術也都て奢ハ僭フ所より出ルもの也然ルニ大名の事物ハ大名の事物士百姓町人の事物ハ士百姓町人の事物ト一物一事悉ク制度ある時ハ上下尊卑混乱せずして費用も薄キ也是を制度の大趣意ト知へし惣して當世の武士の風俗ハ暖過て逸樂ニ而已走ル也此故ニ屹度制度を立て奢を抑ヘ貧ヲ救イ武政を施シて能教諭シ武藝を勵シ武器を嗜操ニ仕向ケ其上ニ時〻武器改をなして心懸悪キを罰シ心懸能を賞する時ハ武術必勃起すへし怠事勿レ

○法令ハ上の如ク制度を立置て何等の制度を破りたる何等の罪ニ行べしト号令を下し置て違背の者をバ容赦なく法令の通りニ行フべし是法令の趣意也

○衣服の事是ハ章服の法也天下の章服ハ志むらく不論國持大名以下其國切其家切の章服ハ大將の心次第ニ定らるべきもの也假ニ五六十万石の國を以て云時ハ其國諸士の品位を三四段ニ分て何役より何役迄ハ紬何より何迄紬太織何より何まで染木綿染紙子凡下ハ嶌木綿嶌紙子ト定ル類也尤妻女の服も夫の服ニ准ずべし陪臣ハ紋の大小幷染色等を以て相分て直参ト別つべき様ニ定ムべし是章服の真似ハなれども倹約を教へ貪を救ひ尊卑を分ツ事是等の事ニて事足ルもの也制スべし但他國江勤ルニハ羽二重をも免スも可なるべし

附火事具野場支度の類ハ革たらんさい木綿の類なるべし是も章服の意味ニて

役の高下に因て紋の大小或ハ色品の分別有べき事なり陪臣亦其別有るべし

○飲食も衣服の如ク士禄の大小を三四段に分て一汁一菜より二汁菜迄に限ルべし酒肴も是に准スべし古より飲食男女ハ人之大慾（ヨク）存（ソンス）と云て病の起ルも貧窮するも武備の弛（ユル）ムも此二ツより事起ルものなれば人々可慎の第一也

右衣服飲食の定メハ冠婚喪祭其外重キ饗應（並）他所外人の出會ト云ども此制度を破（ヤブ）ル事勿レ破ル者ハ罪をべし一事破るゝ時ハ萬法皆ゆるむもの故可慎

○家作も上の兩條に准して或ハ門或ハ玄關式臺或ハ瓦葺（カハラフキ）色辟張附疊等の制度を定ムべし

○婢女を召使（ツカウ）事も家の子れ妻女等を召使べし別に婢女として召抱ル事勿レ但レ子孫ノ為に妾（シヤウ）（メカケ）を召使事ハ格別、へ然るカし〳〵大禄富有の

者なりとも妾一人に限へし尤三十年迄子無妾ハ召置事勿レ、勿論子孫繁多ノ者ハ、妾りに妾を召置事を禁ス

○大小高下を不言、刀、脇差の拵并諸器物の餝金具等に金、銀、赤銅類禁ズへし

○青漆鋲打等の女乗物或ハ、純子、天鵞絨類の挟箱油単等ハ、大禄富有の者なりとも用ル事を禁ス

○冠婚喪祭等一く制度ある事なれとも繁多なる故茲に不肖先規を鑒て定ムへし但し冠婚にハ親戚朋友心を用て贈物なるへし病難喪祭にハ多少に不拘金、銀、銭を贈て病家を問、喪祭を助へし旅立の贐亦然り必飲食の物を贈ル事勿レ是古の制也

右重立所の制度、二三ヶ挙て示ス之ハ精詳に工夫を加損益斟酌して定ムへし扨右の如ク上着ト制度トを願フ事ハ武士れ奢侈ト柔弱トを止度故ハ尊氏卿の遺訓

ニも数代京都ニ在職せば公家風ニ移て武氣ヲ取失フ事あるへし此事忘ルヿ勿ト戒メ玉ヘリ又應仁以来、乱ヲ辟たる公家上臈（ラウ）、大内家ニ取入て其家風ヲ香奢（キヤシヤ）ニ移して大内家滅亡ニ及リ是等の事を思へば寒心スル故土着制度等の事を述て奢侈ニ習シ人〻ニ再ヒ質朴のむかしを知しめん事を願ものゝ

○土着制度等の事、徂徠、春臺等の諸先生方きてニ述し所なれども説様の拙き故聞様の悪き故又改革の變を恐ルニや誰一人土着の風を起したる族もなく制度ヲ立定（サダメ）たる人もなし然ルを今又小子是を述ルハ贅ト云へし其贅なるを又述ルハ人ヲして土着、制度等の大意を知しめ漸（ゼン）〻ニ其風を起さば上ニも云し如ク三十年の間ニも遂行ルへし遂行ハれば武門の大慶是ニ過たるハなしト思フ故強て人ニ示ス、是小子か贅言なれども

日本の武を厚くする術、斯に在哉

第十四終

海國兵談第十五巻

馬之飼立仕込様（付騎射之事）

昇平愈久しくして華美愈盛ニハ華美盛に成て士風懦弱ニハ然して後武藝地に墮て古儀を忘却せり就中、馬ハ武士の足ニハ能熟せざれバ有る可からバ當世ハ世の中れ華美に習て馬の飼様上品なるなる故第一ニ馬弱く尤乗（ノル）人も其真味を喰覚なるハ人少し當時ハ諸大名の家くに軍役の定有て人くハ馬を持（モテ）ルをバなれこしも定の如く

持事ゆゑハさしるゝ華美ニ引るゝゆへ之能く思べし此下ニ馬の天性ト昔武士の馬を持易（ヤス）かりしわけトを記ス是を見て往昔を知べし

○馬ハ元来山野の獣之へ野草を食（クラ）イ水を飲（ノミ）風雨を承（ウケ）て生を遂（トゲ）ルもの之へ此心持を呑込て野草ニて飼（カイ）立ゐる馬ハ形容（カタチ）ハ枯瘦（ヤセ）ゑて見苦けれども人を負（オフ）て奔走もハ力ハ天然ニして馬の持前之此所を會得して飼立ル時ハ當世の如ク諸事ニ物入事無して人ゝ馬を持易ト知べし

○古ハ小禄ニても武士トさへ云バ馬をバ必持し事之尤持るゝわけなりし之其わけト云ハ段ゝ述し如ク土着（イナカスマイ）之土着なハ故、秣（マクサ）ニ事欠（コトカケ）事なし時ゝ糠（ヌカ）、大豆（マメ）麦（ムキ）稗（ヒエ）等を飼事も手作物なる故、物入事もなし爪（ツメ）髪（カミ）四足（スソ）等も手自せなハ故別當、口取なくして別ニ人ノ入事もなし如此なれバ故小禄ニても馬を持し之當世も百姓を見べし僅ニ田畑の四五六反も所持の者、馬を

て心易ク持也是土着なるが故ニ亦古の軍役ニ六貫一疋ト定メたる事なり六貫ハ今の知行ニて六十石程ニあたりて是程の小身ニても馬をも必持シ也當世ハ六百石ニても馬を持事、仕難シ其てけな段ハ云レ如ク武士たる者皆知行所を離レて主君の城下〱ニ住居せな故人の集ルニ随て萬事華美ニ成レリ其華美ニ習て馬を飼フ事も大ニ古義を失へり又近世ハ馬役ト云者出来て代々の家業（カキヤウ）ニて馬の事を司ル（ツカサドル）事、世上一統の風俗ニ也然ルニ術ノ馬役ト云者飽（アク）まて凡俗の匹夫なれバ故古義などハ夢ニも不レ知、只當流の馬場乗を致スのミの事ニ也然ル故ニ只口向（ムキ）足振（フリ）を大秘訣ト心得ルのミニて皆武用の真法を失イたれバ也又人君執政等モ俗人多けれバ弊流を改ル志もなく馬の事ハ彼ノ馬役ニ打任ル故自然ト馬役等ニ威權附て何（ナニ）知ぬこしも其言所を人々用ル也畢竟の所、武術衰微（ブシユツスイビ）して武藝を藝者ニ備

かゝる故如此事ニ成果（ナリハテ）なり扨馬ハ武備の根本ニ而然ル故ニ異國ニてハ千乗の國、万乗の國抔ト云て車馬の数ニて諸侯の大小を定メ也（今世の幾万石なと云ク如し）亦大司馬ト云官も惣大將の事ニ而然ルを惣大將ト不云して大司馬ト云事も馬ハ軍務（ム）の根本なれハ兵馬を司ル役ト云心ニて司馬ト云ニ而 日本の古しも左右の馬頭（ムマノカミ）有て左右の馬寮（メリヤウ）ヲ司まて是則大將ニ次（ツケ）ル官ニて甚重キ職ニ而中ゝ當世の馬役如キ凡卑の役ニ非ル ニ而是皆馬を重ンぜざるが故ニ而如此大切なる馬を凡俗卑陋（ホンゾクヒロウ）の馬役ニのミまかせ置てハ物の用ニ立難シ志ある人君、執政、法を古義ニ取て如何様ニも工夫を附（ヅケ）乗方を制作して馬を教置べき事、大人ハ言ニ不及、都て馬を持（モツ）もの、慎なるべし、先當世の馬ニ十六の失ある事を知べし、是を知て教を施さバ馬術、用を不失ニ近かるべし、一ニハ平生責（セメ）馬の法、大ニ拙シ、責馬ハ毎日乗（ノル）を善トして四の乗様

あり馬場（バヾ）乘（ノリ）遠乘（エンジヤウ）當物、乘廻（ノリマハシ）ハ二ニハ平生上食ニ馴（ナラフ）故、なまし麁食を飼ハ且食少く且疲（ツカル）三ニハ遠乘を仕込さる故まれニ遠乘すれハ早く血下り、或ハ息尽、或ハ不食して用ニ不立、四ニハ平生、口を取せ鐙（アブミ）を押（オサヘ）させて乘下（ノリオリ）する故獨乘をすれハ馬動（ウゴイ）て乘難ハ五ニハ平生風雨寒暑ニあてさる故是を犯せハ且（カツ）疲（ツカレ）且病、六ニハ平生山坂を乘さる故羊腸の道ニ苦ミ疲ル七ニハ騎射を教さる故なまし弓炮太刀打等を馬上ニ施せハ驚て駈出ス八ニハ鳴物ニ馴さる故音聲ニ驚キ易シ九ニハ目立物を見習ハせさる故采色異形ニ驚、十ニハ水馬並ニ船ニ不熟（シユク）ハ十一ニハ糠（ヌカ）太豆（マメ）を多く飼て肥過（コエ）ル故早く汗シ早く疲ル十二ニハ平生沓（クツ）を掛（カケ）て乘故なまし徒足（スアシ）ニて乘ハ足裏を痛て乘事不自由ハ十三ニハ平生同居、同食等を教さる故、馬同士近寄ハ咬蹴（カミフミ）して騒く、十四ニハ、牝（ヒン）を見なれさる故まれニ牝を見れハ揚躍（オドリハ子）スル

五ニハ溝堀切岸等を飛越事を不知、十六ニも馬甲の類を見習せさる故是等の物を施ス事あれハ馬甲も軍用第一の馬具なれとも別して忘却ある間敷事也　都て此十六ハ當世の馬の失なき所也　武を任人、大小高下を不云心を可用事也　此下、十六の仕込様を記ス　猶考へし

又近世馬乗の家ニ軍馬の傳ト云事出来て是を大秘訣トなして起請ニ起請を重て相傳ス甚キハ公儀ニ達シ廣原ニ幕なと打廻て相傳せるもあるへいかに世の中武術陵夷となりぬれバとて是程おか敷事ハある間敷也　恥へし〳〵

少ク武術ニ眼を附ル時ハ別段ニ軍馬の傳ト云事モ無用の物なるへし　只古戦軍記等を多ク見聞して昔士の馬を自由自在ニ取廻なれハを手本として損益有簡なるへし　義経の鵯越を下シ又ハ渡邉ニて海を泳セ亦新田義宗足利家を追て坂東道四十六里（大道七リ半余）を半時ニ追付たる所業なと能師範也　此心持を基本ニして面

面数寄（スキ）次第物の用に立様に仕込置へし初より
前段ニ云如く馬は武士の足なれば可慎事の
第一也怠ル事勿レく
〇馬を仕立ル事二法あり一ハ牧（マキ）を設て野子
を仕立ル也一ハ厩子（ニヤコ）也二法ともに世に行ル
ル事なれハ今新に其説を述ルに不及只國
の寒暖に因て少ク手ありての相違ある迄の事
也扨亦一國一郡をも領せらる人ハ自國にて馬
を仕立度事也尤傳（傳僖公十五年）に異産（イサン）に乗ぬる事を譏（ソシ）ル
にて可知異産にハ他國の馬の事也
〇當世の馬場乗ハ古の庭乗の遺法（イホウ）（ノコリ）也前にても
云如く古の武士ハ皆達（タツ）者を本トしてやぬる
乗を第一ト志ぬる事なれとも饗應或ハなく
さゝの為なとに貴人高位の前にて馬を乗時
やりぬる乗にてハ其様（サマ）見苦く其質野（シツヤ）（イヤシ）なる故庭
乗の式を以て乗事も武士の嗜（タシナミ）ト致しぬる事也本間
孫四郎馬場殿の庭上にて龍馬を乗ぬる事なとも
可考然ト云とも當世の如く一槩に馬場乗而

己を馬術ト心得たるよりなりしハ、やゝもすれバ乗を本トして其余計ニ式の乗形をも学ビ置、し事之是武馬の順道也

○馬場乗も當世の仕形ゟ其一を知て其二を不知所なり其つけゟ口向足振のことを第一ト致て當物の術甚疎（オロソカ）也然ル故ニ馬場乗ニ於（イテ）ハ好上の馬も物ニ慄（オチル）が故ニ途中にて乗事不能もなり是平日ニて物をせざる故也是其一を知て其二を不知所也可思

○馬ハ天性驚易きもの也此故ニ敬（ツヽシム）馬の二字を合て驚字を制したり其意味推て可知、上ニも云如ク口向、足振ゟ何程見事ニても物ニ驚ク馬ハ物の用ニ立難し古今馬の物慄（オチ）ニ因て害を受たるためし多し可慎、此下馬の乗様十六條を記ス熟覧して睚（ネフリ）を覚（サマ）スへし

○當世細ク長き地面を馬場ト名付て馬を乗ル所トはすれども是亦真の馬場ト云ものニあらず真の馬場ハ狭きハ方十六七町、大なるハ方

百町にも構置て馬而已に不限人馬器械を備て練兵をなす所トス是真の馬場之

○馬場乗ハ上にも云如ク庭乗の遺法にて馬に行儀を教ル迄の事なれとも當世流の馬場にても事足ル之ハ先其乗様ハ口向、足振を大切に志、馬に振（フリ）を付て行儀を教置事之但シ多ク乗事勿レ只馬の行儀を崩サざる為計に少しづゝ乗置をを善トス

○二ツにハ遠乗（エン、レヤウ）之ハ是ハ近キハ三四十里（大道五六八リ之）、遠キハ百里（大道十六七リ）百五十里（大道二十四五リ）も乗ヘし如此大乗しても馬疲レざるを至極トせる事之ハ是にハ五段の息三段の汗（アセ）、亦ハ走足、躍足、千鳥足、鹿子懸、等の足色、亦ハ息合薬数法あり精密なる事の様なれとも屡乗レバ是等の事も自然に會得せらるゝ也其證據ハ古代文盲なる数萬の荒武士とも何ぞて各右数件の吟味に至ルべきしぞて只屡乗て乗覚ゆる之ハ外に秘訣なし只乗べし

○三ツにハ當物之ハ是ハ彼ノ大馬場にて雄旗

金鼓甲冑弓銃の類ハ云ニ不及、抜身の刄物、松明等其外異類異形の物迠一面ニ立列、乗人も甲冑を着シ馬上ニて弓銃を發シ太刀打、鎗打等を為ヘし是教馬第一の義也如此教置事ハ軍用の馬のミニかぎらず平生の乗馬も右の如ク仕込置ヘし是馬ニ乗者の慎也是を真の騎射騎術ト云也左傳ニも（僖公二十八年）虎の造物を陣前江押出シ敵の馬を慄シて踏破りせる事も有可慎

○四ニハ乗廻也是ハ早足ニ不乗地道ニ乗て三四五十里まで乗廻馬の氣を養置事也

○五ニハ大風雨雪等又ハ大寒、暑の時節、終日乗廻て如此悪天気ニ馴置ヘし平生、箱入ニ仕込置ける馬を俄ニ是等の悪天気ニ當れば忽チ疲レ忽病もの也

○六ニハ山坂、羊腸れ場所を乗廻て悪道ニ馴置ヘし必平場のミ乗事勿レ

○七ニハ騎射を能く仕込置ヘし然ながら當世流の騎射ニハかぎらず第三段目ニ云ル如ク

馬上の荒態の事ハ當世流の騎射の事ハ下ニ詳ニ弁せしが如し

○八ニハ貝太鼓、鑼、鐘、喇叭等其外種々の鳴物を馬上ニ打鳴て馬の耳を鍛置べし阿蘭陀流ニハ鐘太鼓をも馬ニ仕附置て馬上ニて打鳴スハ又　日本の古も旗持ハ皆馬上ニて旗を持シハ今も朝鮮ハ馬上旗ハ

○九ニハ甲冑ハ云ニ不及旗指物母衣の類亦ハ抜身の刄物及ヒ松明等を馬上ニ振立て馬の眼を鍛置べし

○十ニハ川渡、水馬等を仕込べし尤船ニ載て水上を往返シ或ハ船より水中江追下て船ニ引添て泳をはす事なども致べし

○十一ニハ中肉ニ飼立べし肥過ル時ハ早ク汗シ早ク疲ル遠乗ニ損あり必十分の肉ニせる事なかれ

○十二ニハ平生、徒足ニて乗べし沓を掛て乗馴事勿レ松前、ハ藁の無、土地なる故馬ニ沓掛

五陪子一文
鉄屎十五文
胡粉十匁
ナカス、[illegible]爐
山茱七匁
右細末鉄
漿ヲ以テ
膏薬ノ如
ク煉合セ
爪裏ヘ張
之明日乗
ニハ今宵
張テ沓ヲ
打置之

ル事なし其地大寒國の石地なれども足裏を痛む馬もなし是石になれて足裏堅硬（ケンカウ）（カタシ）になりなる所ハ平生岩石山に働ク人の足裏（ウラ）ハ土ふまず迄皮の厚キが如し（強て足裏を痛ぜ金履れ傳ゆり其方頭にゆり）

○十三ニハ平生同居同食を仕込置へし當世の馬ハ此ならしなき故馬同士近寄（ヨレ）ば咬（クイ）蹶（フミ）して騒（サワグ）太に不自由なる事之上ノ如ク仕込置時ハ軍中などにてハ五疋も十疋も一廐（江）追込置ヘ是を便利トス

○十四ニハ牝（ヒン）馬を見馴て牝に近付ても揚躍（アカル）（ヒヤク）せざる様に仕込置へし當世の馬ハ一向に牝を見馴（ナレ）ざる故まれに牝を見レバ揚躍ス甚不便利なる事之亦古ハ和漢ともに牝を乗馬に用なる事諸書に見ユ今も相馬家の武士ハ牝に乗者多シ是古躰の遺風也

○十五ニハ溝（ミゾ）堀切岸（キリキシ）等を飛事を教置へし是平生教置ずして事に臨て急に飛せる事ハ決シて成難事之ト知へし阿蘭陀の乗形にハ堀

を飛せ土居(ドテ)を越(コス)又は馬を立て歩(アユ)ませける事など

を仕込置之へ精(クハシ)ト云へし是又仕込置て損なき

事也

○十六には時々馬甲(ヨロイ)を着(キセ)て遠乗をへし是又

平生施て見習(ナラハ)せざれば着(キ)たる馬も驚(オトロキ)傍(カタハラ)の馬

も驚クもの也都て馬甲は軍用第一の馬具な

れは武備に有る者心懸て制作いたすへき事也

右十六條は敎馬第一の儀也必小子か杜(ツ)撰(サン)

にいふ事ゝは武を任ふ人怠ル事勿レ此下

馬に升ての事二三を記ス猶工夫を加て

仕込へし

○當世馬をいためる事を第一として二月隔

三月隔に少々づゝ馬場乗を致置故馬氣随にな

て手に入難し上に云如く四則(ヨツノノリカタ)を立て毎日乗

時は馬の氣も和イて乗易し古老の物語に馬は

飼殺(カイコロセ)乗殺(ノリコロセ)子弟(コドモ)は敎殺(オシヘコロセ)叱殺(シカリ)ト語(カタ)レリ卑諺(ヒゲン)なれ

とも大道に近し

○和漢古今相馬(ソウバ)の説有て色々六ヶ敷事也先

ハ五性十毛、相性、不性等の説、又ハ旋毛歯牙等の評論様ゝあれども、語ル所ハ文の過なるにて、尤のミ武用ニ拘ル事なし、殊ニ高貴の人ハ物數寄次第なれバ一平士ノ馬ハ強て吟味ニ不及事ト知べし、只腕爪の強キを貴フニ極ル事之

○古昔戰場ニて或ハ敵を驅破又ハ川を渡ス時などハ強キ馬を前ニ立ルト云ども或ハ不悍の馬、亦ハ牝馬等多キ故之ト知べし

○當世ハ肥ふくれて毛艶美馬ニあらざれバ武士ハ不乘しのト思フハ以の外なる事之、初ニも云し如ク手飼の龐馬ニ乘て少も用の欠ル事なし、尤辱ル氣色もある事勿レ、古代頼朝卿の生好、研墨、義經の太夫黑、高時の白浪抔にて事ゝ敷評判をなしも傍の毛艶悪ク瘦形の馬ト競見故、名馬の称も一際強キ事ト思ハるゝなり

○馬ニ三等ある由武備志ニ見えたり能高峻を

上下をはしりハ能敵陣を踏（フミ）破ニはしりハ遠路ニ疲（ツカ）レ
ざるはしり此三等を能なめし置て夫々ニ用べ
き事之

○水を泳（オヨグ）ニも馬ニ巧（上ツ）拙（ヘタ）はしり能試用べし

○世の奢（オゴリ）ニハ流れて人々三四歳の若（ワカ）馬を好む
なれども若馬ハ武用ニ詮（セン）なし武士ハ馬ハ六
歳以上を善トス、五調ハ筋骨強ク心神も定て
用ルニ勝（タヘ）たり武を嗜人、必若馬ニ乗事勿レ

○熊沢了戒（クヽサハリヤウカイ）の説ニ武士の馬ハ口れ強（ツヨ）キを善
トハ平生ニ強口をも、えはして乗廻（マハシ）川を渡ス時
なご、ハ得手（エテ）の強口江引懸させて渡ル時ニ一
手際（ギワヨリ）能渡ルヽ此故ニ士ニ馬を上手ニ乗ニハ
らされを不叶事之ト云り小子按ニ此説甚善（ヨシ）
然ト云ども上手ハ少ク下手ハ多キ事定りぬ
る事なれを自己の藝（ケイ）の程も不計して一筋ニ
強口の馬を善ト思（オモウ）ハんか事なはへし亦或人
の説ニ戦場江乗（ノル）馬ハ少ク不悍（フカン）なはを善トス
其故ハ悍強（ツヨ）ニて進過（スグ）ルを引止メくく乗行な

其様見苦(クルシ)くて且勢(イキホイ)ぬけるもの也亦不悍にて走ル事遅(オソ)きに諸鐙(モロアブミ)を入てさそひ立、又ハ鞭(ムチ)など加て進ミ行を見どもして且勢あるもの也ト古老の物語を聞覚(オホヘ)なりト語(カタ)リさしもあるべき事也然ト云ども上手にして強(ツヨ)馬を自由自在に乗粉成(リコナス)にハ不如此二ツハ人々自己の藝次第、心に任セて用へき事にハ云なかりし足れ代りにもは馬なれハ丈夫を心懸へき事也

○古昔、乗尻(ノリシリ)の達者ト云ども手綱(ツナ)に不便、鞍(クラ)にて押廻(オシマハシ)て馬を自由自在に乗粉成(ノリコナシ)なる事也此故に乗尻(ノリシリ)、ト云なるへし今ハ手綱の釣合(ツリアイ)を第一ト乗故、乗手の上手ト云へき、か是小子が臆談(オクタン)也

○昔武士は馬を取扱(アツカ)フハ別に口取ト云者(モ)無(ナク)、自身取扱て當世の馬郎(マコ)等が馬を自由自在にそはト同様なは事にして或ハ乗、或ハ牽(ヒキ)其扱甚麁畧(ソリヤツ)なれども馬をもて能使イ粉成(コナス)ハ當世の武人ハ馬塲にて馬を乗事上手なるも馬を

扱事ハ無術ナル馬郎ニ不及是攀修ニ習て武士の荒気なる風俗を取失ふゆへ故の事ハ乗、著ども扱ハ不成ト云ふ其一を知て其二を不知ト云ものハ可思

○厩ハ気の漏様ニ拵へし馬ハ熱物なる故気漏さる時ハ病を生ス但し気を漏スとて寒クせよといふニあらず只冬ハ厩ヲ暖ニし夏ハ廡ヲ涼スト云り可考

○唐山和蘭等ニて馬の鼻を割裂キ金丸を去事なり是息を長くし馬を強クせしむるの術ハ是を騸法ト云甚良法なれども　日本古来より此法無して千軍万馬の功ハ異國ニ劣ル事なし是を以て見れバ今更騸法を可羨ニもあらず只珍キ説なる故此ニ記て初学の人の見聞を助ルのミなり

○軍中又ハ遠乗なとニハ四方手ニ附ル物ハるへし動揺せさる様ニすべし動揺すれバ馬疲るゝものハ

○馬ニ飼物ハ野草藁等ハ云ニ不及葛萩ノ類又ハ苦味なき木の葉類何ニても可之手ニ當次第可飼食間敷物ニても自らニ出て不食もれ之又河海の水草を飼ぬる事もあるニ之菰なこ別して好

○夜も當世の如ク寢藁を厚ク敷蚊遣等を焚て臥さしむる事甚謂なし夜も長ニ足て瞌セ置べし四五日ニ一度も僅ニ轉をうたせて可之兎角寛ニ寢さしむる事ハ不好事之且赤四足も平

來一作下

生ハ水洗足ニ仕附置べし只爪根爪裏までに心を用て洗べし是も四五日ニ一度上湯ニて大肩まり洗て可之又流川ニ四足を浸事湯まそれ勝ル事あり赤血下りあしとて休置時ハ愈血下て足不自由ニ成ものニ之血來な愈油斷なく乗べし但し保養の為ニ乗事なる故心を用て乗べきなり夜眼をで每月燒を善トス怠ル事なかれ兎角世ニはきて馬の飼樣も華美ニ成ぬれとも夫を破て懦弱ニ落入又樣ニ飼立ル事

肝要也此心得にて飼立ル時ハ馬ハ丈夫にして能人を助人ハ物入少クして馬を持易しと知へし

○筋切れ事甚慎ムへし元来馬形を取繕（ツクロウ）て高貴れ直（アタイ）を貪ル馬商人（アキ）の致ス仕業なれバ武士たる者假（カリ）にも為（ナス）間敷事也足の筋ヲ切たるハ上下りれ坂道ニ苦ミ尾筋を切たるハ水を渡ス時鞦（シリガイ）をぞろし事ありと云り何レにも武用に害ある事なれバ武士たる者誓（チカツ）て為間敷事也

○鞍も今の制ハ古法を失リト思ル古制の鞍ヲ見ば前輪（リ）大クして高く乗間（ノリアイ）甚廣し今制ハ是ニ反（ハン）せて何レにも戎服（ジウフク）の鞍ト常服の鞍ト差別あるへきれ猶縉紳家（イエスヂ）に求へし又皇都ニ石井家あり東都ニ伊勢氏辻の二氏あり問て精詳を致へし

○馬を持者ハ少ク療養（リヤウジ）の道を知へし然トモ云とも深遠の術を苦ミ学ニハ不及事也只血を

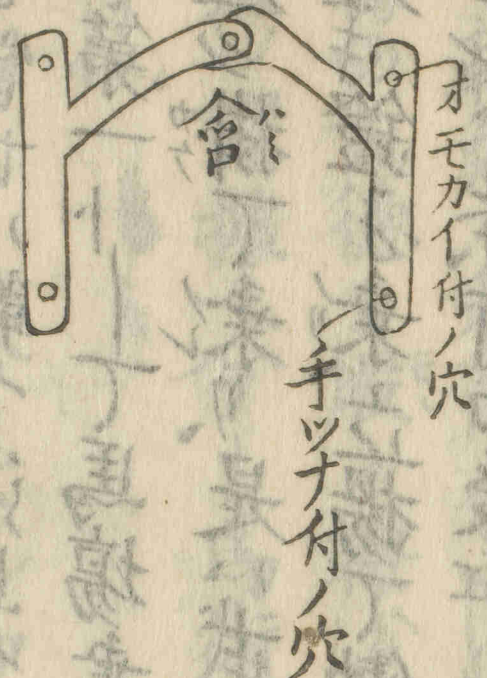
刺夜眼(サルヨメ)を燒(ヤキ)或ハ虫気腹痛打身折等の藥を知て事足へし是又馬を持ル者ハ嗜ミへ卷末ニ倉卒ニ備ル藥方二三を記ス猶閑暇の日学ビ置べし

○安永乙未の年小子崎陽ニ在て多ク唐山(カラ)和(オラ)蘭等ノ人ニ面接ス其中和蘭人の鄉御を善スルアーレントウヱルレヘイトてふ者ニ對話(ハナス)ス彼が數說の中可取事ども有リ一ニ云馬ハ前高ニ有りされども乘難し今

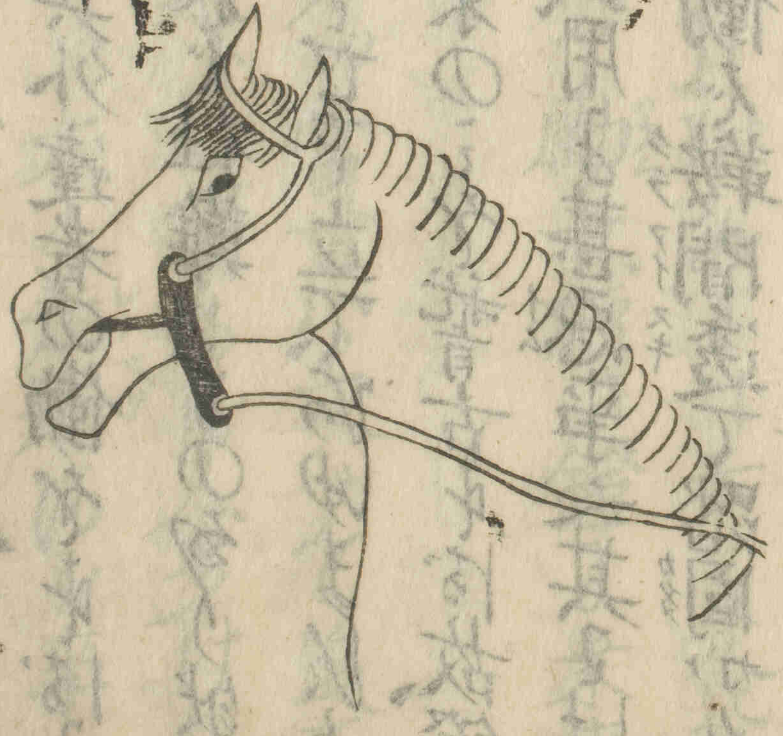
日本流ノ乘様を見ニ馬を前高ニ為(セ)ンため、鞍より引ためて又ニ手綱ニて口先を引上て乘(ノレ)り是ハ上手ニて手鞍も利(キク)故其人の乘ためは時ハ向高(ムカウダカ)ニ成へきなれども手鞍弱(ヨハ)キ下(ヘタ)手の乘時ハ持前の向卑(ヒク)ニ成て乘悪(ニク)し是ニ馬を向高ニ拵(コシラヘ)ざる故ニ和(オ)蘭(ランダ)流ハ馬を向高ニ拵置故小兒を乘(ノス)ためにこも向下(サガラ)しくトハ扱其拵様ニ二歳の時より厩ニ置て草を食(クラハ)せむるニ馬の首より高ク格子を構(カマヘ)其格子の中ニ草を打込置時ハ馬彼ノ草を

食ントしてのび上リ〳〵草を噛（カム）故ニ成長ニ随て、いきごなし向高ニ成ト云ヘ又曰向高ニ可致ためニ無理ニ向を引立ル時ハ口先ばかり妄（ミダリ）ニ上レリ、口先妄ニ上ル時ハ馬の気放（ハナレ）て物ニ驚易（オドロキヤス）ク其上、足本見（モトミヘ）ざる故蹶（ツマヅク）事多シ、和蘭流ハ首をば高ク持セて口先をば下（サゲ）て北斗をしめ置ヘ（北斗をしめハ東奥羽の俗ニむげを付ルト云ヘ）北斗をしめる術ハ轡の制ニよリ此如ク仕込ば気止ツて物ニ不驚、足本見ヘて不蹶ト云リ奇術哉

阿蘭陀轡之圖



含ヲ山形ニシテ横ニアカク之仕カケテ手綱ヲ引（ヒキ）シムレバ含先下リテ舌ヲ押故北斗ヲシメ口ヲモムスブ之



右の轡間暇の時制作して試ムへし　餘口

をむまふハ小子ハ是を見なして

○都て馬上ハ組打其外達者の働をもなすなる鐙(アブミ)を踏張(フンバツ)て立揚(アガラ)ざれバ仕難キものなり然ルに當世ハ鞍を長馬をせめて立てあゆまする事を第一トして馬場乗のミを稽古すれハ故、鐙を短ク掛(カケ)て乗(ノレ)り、是ハ武用に甚忌(イム)事ニハ其ことける短キ鐙に乗(ノリ)、立揚て働ども鞍間(クラアイ)透(スキ)て堅固(カタ)ならなく己レが躰、前カ後ヘ江をしんで打反(カヘル)ものニハなき と見るへし亦古戦物語等にも歩武者をもぞ鐙ハ鼻(ハナ)に當(アテ)例(タメシ)ト云り是短キ鐙にて仕難キ働ニハ今も朝鮮人和蘭人等ハ馬術ハ何レも立鞍ニハ又蜀の玄徳も股(モヽ)に鞍ずれ附なりト云り是皆長鐙ノ證據ニハ今も馬術を勵(ハゲム)者、短キ鐙に乗事なかれ

○初より段〻云シ如ク當世ハ走りを追て矢を發(ハナ)ス事をのミ騎射ト心得なる人多けれども古の騎射ト云ものト太に差別(シヤベツ)ある事ニハ古(ム)昔(カレ)騎射の達人ト云、又ハ馬(ハ)術の上手ト云ハ馬

上ニ弓を射ルのミに不限都て馬をば己レが足ノ様に心得て嶮岨山坂ト云ども馬より下ル事なし溝を越（コエ）堀を飛（トバ）スル事甚自由ニ其弓射躰（イルテイ）を見に弓（ユン）手の敵を射（イル）ハ勿論ニ馬（メ）手の向（ムカウ）筋違（スヂカイ）をも射、又後（ウシロ）をば、おしもどつてに射なり扱矢種盡ルか或ハ敵近付ば弓をば納メて太刀打を致シ又ハ引組て己レが鞍壷江引付など仕なつて是を馬術とも騎射とも云シニハ扱今の騎射ハ古の流鏑馬の遺風にて式の騎射ニハ只、

神事饗應等に用ルのミにして敢て武術ニハ云難シ其事の起りハ古代處ゝの神事、祭礼に神勇（イサミ）の為に社人神主などの射なる事ニ然ルハ故に今も古キ神事にハ皆、流鏑馬（ヤブサメ）あるニハ是當世の騎射の濫觴（ハジメ）にして騎射と云名目ハ同シ事なれども式を本ト志たる射形なるが故武術の騎射ト其態（ワザ）に精粗剛柔（ツヨシヨハシ）の差ありト知へし

○古代の騎射ハ右に云如ク悉ク達者なりし事も古ハ都にハ鼓吹司（クスイシ）、國ゝにハ軍團（グンダン）有て兵

馬の働を教又犬追物牛追物或ハ戯道なとゝて人馬の大足場揃度〻なりし故其風天下に周して諸國の武士皆馬術に達し居たり是をこそ真の騎射ト云べき事ニハ當世にても各禄に應じて養置人馬なれとも右の心持に仕込置度事ニハ都テ此一巻ニ述シ如に仕込立たる馬を無事太平の用に立ル事ハ仕易レ又當世の馬の如ク華侈に習テ騎術其外荒氣なる事共に不馴馬を俄に荒事及ヒ戰場等に用ル事ハ決して不相成事ニハ只兎にも角にも養置人馬なれとも上に云如ク仕込置て不虞の用に備度事ハ是を武備ト云邦君執政忘却あるべからず

○右馬術の数説ハ二百年來昇平に生レて俗習のミ傳授なりし馬乘の輩ハ一〻不得心にて却て此説を以て馬術を不知ト言或ハ狂気乱心の所業なとゝて実に思フ人もあるべきなれともそれハそれにて俗習のかくになりたる

凡夫の上ニハ尤の事なるへし然レなから尤
なりとて不決断を生して彼ノ凡夫の輩ニま
かせ置てゝ物の用ニ立難けれバ凡夫ハ凡夫
ニて呑込セ様なるべし馬ハ馬ニて物の用ニ
立様ニ仕込へき事又此上の決断ニして肝要
の又肝要なる事なれど邦君の明断、改弊の經
済、武徳の活潑を仰ク所之

　急用馬薬の方左の如シ

牛馬平安散（不食、腹痛）

烏梅　黄栢　甘草（二）　楊梅皮（各三十匁）
莪朮　三稜（各十九匁）　大黄（十二匁）
右細末、梅干ノ肉ヲ水ニスリ立テ一度ニ二五
匁用ユ○又右ノ薬法ヲ一貼五匁程ニ調合
シ梅干三ツ入テ水煎シ用ルモ好

人虫丸（打身　五淋　小便閉　糞結）

人虫（二）　龍脳（一両）　活蔞根（一両）　草撥（半両）
甘草（一匁）　水銀（二朱）
右細末米糊ニフノリヲ和シ龍眼の大サニ

丸シ葛粉ヲ衣トス打砕テ飼ヘ飼汁数品アリ其法ヲ用ベシ○筋病ニ蕺菜（トクダミ）の煎汁○打身ニ赤地利煎汁○尿閉ニ木通煎汁○大便結ニ榧木ニワトコ煎汁○息ニ藜芦人参煎汁○中風ニトクダミ煎汁右何レモ丸ヲ打砕此汁ニ攪立テ用ルヘ

足痛

活蔞根　カラムシ根ニ芥子

右三味等分搗合塩少加痛所ニ傅

背ズレ

松魚（黒焼）　黄栢　烏賊（イカ）魚甲

右等分細末シ傅

ズリ疵

牛皮　犬頭

右黒焼細末胡麻油ニ和シ傅ヘ

血下リタル𪜈塗薬

カラシ　野カラムシ　カハラケ

塩

右等分細末醋ニ和シ足ニスリ付

内羅茱

人参　茯苓　乾姜　陳皮

右細末酒ヲ以テ七八匁ツヽ日ニ二度用ユ
病癒ル迄用ヘシ

糞結

牽牛子（一両）　大黄（一匁）　射干（二匁）

右細末シ酢或ハ鉄漿ヲ以テ七八匁用亦水
煎服モ可ヘ

寒気中不食戰慄（ブルイ）等ニ用

白茯　木香　茴香　乾姜
紫胡　前胡　村立（各三匁）獨活
白朮　蒼朮　葛粉　羌活
黄栢　楊梅皮（各二匁）　川芎
陳皮　フナバラ（各一匁）
味噌少加水煎服

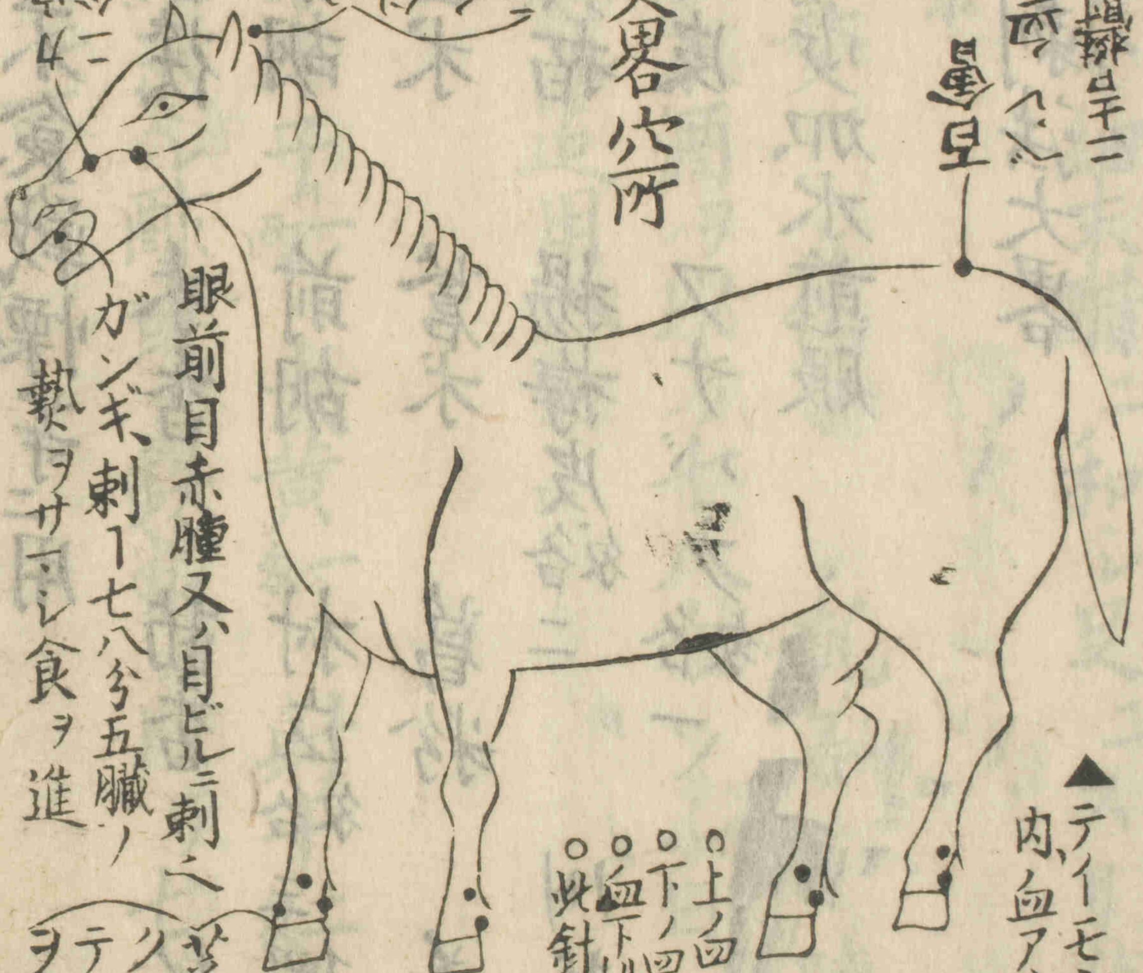
刺法大畧

百會 針タケ指ベシ 血不出万病ニ吉鬱拂之

刺法大畧穴所

八用 針タケ刺ベシ 血不出万病ニ吉鬱拂之

カウモン指ヿ二分内乱ニ吉



▲テイモンテイトウハ八穴ノ内血アル所四穴指ヘシ

○上ノ四穴ヲテイモント云
○下ノ四穴ヲテイトウト云
○血下リ足痛時指ベシ
○此針ヲ四血ノ針ト云之

眼前目赤膧又ハ目ビルニ刺之

ガンギ刺ヿ七八分五臟ノ熱ヲサマシ食ヲ進

芝引ソジキニ佳、血落テ裏痛ニ佳四血ヲ取テ不引ニ吉

右數條ハ急用療馬の大畧ニハ其病重キヲ至テハ伯樂家より赤場所ヲ因テ馬を捨ル事もあるへ時宜ヲ因へし

第十二五終

海國兵談第十六巻

畧書

文武ハ天下の大徳にして偏廢すへからす然ハ禮樂刑政揃て國家を經濟すれハ事文にあらされハ程よき事を不得暴逆を討伐して國家の害を除ク事ハ武にあらされハ叶難し夫國家を經濟すれハ者ハ刑を設て非を禁ス蓋兵ハ刑の大なるもの也此故に先王屢兵の事を云リ又湯王ハ商を興シ文武ハ周を興ス皆能武を用ひたり

我
神武帝始て一統の業を成て人統を立給しよ
り神功皇后三韓を臣服せしめ太閤の朝鮮を
討伐して今の世迄も本邦に服従せしむ
る事なと皆武徳の輝（カヾヤケ）ル所之然ル物本末あ
りて文も武の本なり文を知されど武の本躰を
會得しがたし近頃今川了俊が不知二文道而武
道遂不得二勝利と云ルも文武一致の趣を呑込
たる言にして俗見の上にハ殊勝之抑兵に二

あり國家を安せむ為に兵を用ル者あり利欲
を恣にせむ為に兵を用ル者あり、夫暴乱の者
出て民を悩し國家を動乱なさむ時ハ兵を出し
威武を示して暴客を討伐し國家の害を除ク
是政の為に兵を用ル之其外一揆の徒出て干
戈起ル事あり或ハ恨に因て不意の軍を起し
又ハ外國より来り襲（オソウ）事もあり惣て不慮の動
乱（ラン）あるが為に平生武を不怠、ハ國家に主たる
者の慎にして是兵の正面武備の真中之故に

司馬法ニ天下雖安忘戦則必危ト云リ是ヲ以テ思ヘバ武ハ天下ノ大徳ナル事必セリ此趣ヲ呑込テ各其禄ニ應シテ備ヲ不弛（ユルメ）ルヲ真ノ武将ト云フ亦利欲ヲ恣ニシテ人ノ土地ヲ貪リ或ハ私ノ恨ニ干戈ヲ動シ又ハ人ノ富貴ヲ羨ミテ妄リニ兵ヲ出シ徒ニ人ヲ殺戮（サツリク コロス）シ國家ノ患ヲナス是ヲ國賊ト云フ此二ヲ能會得シテ國家ニ主タル者ハ武ノ本躰ヲ失フベカラズ扨武ノ本躰ヲ會得スルニハ文ニ因ヘシ文ハ書ヲ讀（ヨム）ミテ本トス廣ク書ヲ讀時ハ和漢古今ノ事情ニ達シ損益得失ヲ呑込故、誰傳授セルコトモナク自然ト文武ノ本躰ヲ會得セルコトハ是小子ガ杜撰ニアラズシテ和漢英雄ノ教訓ハ此理ニ因テ思ヘバ一國一郡ニモ主タル者ハ文武ノ道ニ暗キハ尸（シ）位素餐（ヒトタグイ）トイフ者ハ慎ヘシ

○上ニモ言如ク人ノ主タル人ハ臣下ニ文武ノ二ツヲ教ル事ハ職分ノ持前ナレドモ其職分ヲ知レル人主少シ其上ハ異國ニテ文武講習ノ物

語亦ハ本朝ニて淳和奨学、鼓吹司、軍團を置て文武を教られし物語なこハ、屢（シバ〳〵）演説しても皆昔語ニ聞成（ナレ）て是を當世ニ興シ施シて備をなさんト思ヒ立人ハ、主な曾て無之、曾て無之ヿゆゑ幼主ニ文武れ二ッを教ルハ父君ト家老となき故、其成長（ソダチ）かくゝ各其幼主の物数寄次第ニて或ハ遊ビずきニなるもあり、武藝ずきニなるもあり、詩文ずきニなるもあり、茶ずきニなるもあり、狩好（スキ）ニ成モあり、勤きらひニなるもあり、國政きらひニなるもありて各面々吾〳〵初ニも言シ如ク物本末あり、人主の本末を言フ時ハ文を学て國を治メ武を張て國を彊（ツヨ）クせは事本ニして、茶の湯、田獵等の雑事ハ末之然レど此末のことを知て、本を知さは様ニ仕立ル事ハ、父君ト家老トの過（アヤマチ）ニして可悲の第一之末の雑事を行て楽ムも至極の悪行ト云ニもあらざれども初メニ言シ所の尸位素餐の類なれど先（マヅ）本を捨置て末の雑事を玩ブ様

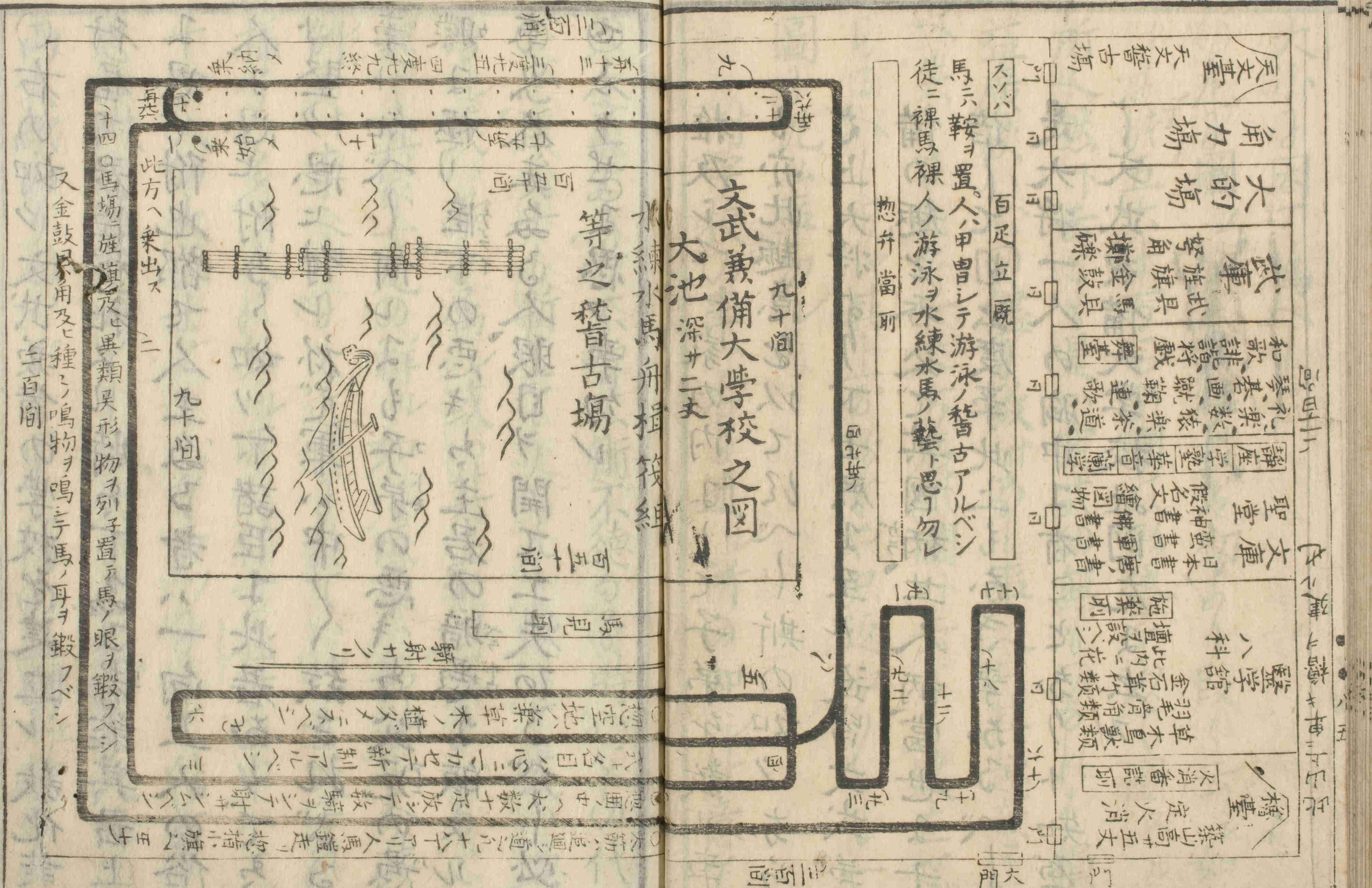
ニ有度事ニハ此物語武政の主意ニして存亡の係ル所なりけれバ故茲（コヽ）ニ是を記ス。人々能本末を弁スへし

○右ニ言、鼓吹司、軍團等の事を當世ニ施し行フニて危のミ六ヶ敷事ニあれバ然レども不呑込ざる時ハ異國の辟雍、泮宮等の圖式ニ泥て其建立甚六ヶ敷成て終ニ止ム事もある也是ハ柱ニ膠（コトヂ）ト云べし扨文武の教習さへ能行届て太主意ハ立事なれバ其國祿ニ應して手軽（カロク）建立成べし文武の成不成ハ其主れ世話の届クと不届とニよれバ事ニハ能呑込へし今も大名の國々ニ練兵堂（尾州）、清雲寮（備前）、時習館（肥後）、明倫館（長門）、稽古館（筑前）、等の学校有て各文学のミニ不限武藝を講して文武を臣下ニ教ルニハ只ハ其講習の事浅墓ニして十分ならず孫ども一向ニ其形もなき國より見レバ勝レル事甚遠し若人有て学校を建立すべく思ハヾ下ニ圖せし如ク普請すべし然レども是又一途ニ泥ム事なかれ國祿の

大小ニ因て為べし
○左ニ圖スル文武学校ハ初より段々ト云が如
クまだ五六十万石の國の形勢を以て圖スル
所也然ト云ども是ハ定式の無ものなれバ損
益廣狭ハ心の儘ニ致サるゝ事也只其趣意さ
へ失ハざれバ一二万石の國ト云ども建立せ
しるべし況や其上なるをや只返ス〳〵も一
圖ニ泥ム事勿レ
附学校の事ハ右ニ述ル所の如レ此意を

推及して一家の内ニして子弟を教ル事
も亦此趣意を以て成べし斯の如クなら
ば上大将より下士庶ニ至ル迠皆文武兼
備の趣を呑込で其國柄（ガラ）其人柄當世ニ十
倍して目出度事此上もなき事なるべし
是大将一人の胸中ニ有ことなりト知べ
し文武兼備大学校の図左ニ出ス

文武兼備大學校之図


天文臺
天文稽古場
角力場
大的場
武庫
武具
旌旗
金鼓
馬具
弩
角
擲
礫
和歌
誹諧
将戯
舞臺
琴
碁
画
蹴鞠
連歌
礼楽
数
技楽
茶道
静座
学塾
華音
蘭学
聖堂
假名文
神書
儒書
図物
文庫
日本書
皇朝書
唐書
軍書
医学館
八科
施薬局
此内ニ花壇ヲ設ク
金石草竹類
羽毛骨角類
草木鳥獣類
櫓臺
築山高サ五丈
定火消
火消番所
門
大門
三百間
二百間
スソバ
百足立厩
惣弁當所
大池
深サ二丈
九十間
水練水馬舟楫筏組
筏之稽古場
百五十間
百廿間
九十間
馬見所
騎射サシ
四十
五十
六十
十八
十二
十七
十九
二十

馬ニハ鞍ヲ置キ人ハ甲冑ニテ游泳ノ稽古アルベシ徒ニ裸馬裸人ノ游泳ヲ水練水馬ノ藝ト思フ勿レ

此山上ニ卑キ櫓ヲ建ル也

一 此方ヘ乗出ス

十四○馬場ニ旗幟及ヒ異類異形ノ物ヲ列子置テ馬ノ眼ヲ鍛フベシ

又金鼓貝角及ヒ種々ノ鳴物ヲ鳴シテ馬ノ耳ヲ鍛フベシ

○大筋ハ迴リ道ニテ凡十分アリ人馬馳走リ惣指揮ハ旗ニテ

○惣囲ノ中ヘハ犬数十疋放ッテ数騎ヲシテ射サシムベシ

名目ハ追ニテカセキ新制アルベシ

○惣空地ハ薬草木ノ植ヅメニスベシ

○右の如ク文武兼備の學校を建立シ教化能行届て君臣相和スル時ハ下たる者能其君上ニ思ヒ附也都て人主たる者ハ一向上人の俗人ニ思ヒ附るゝ如ク下諸臣ニ此君ならでハト堅ク思ヒ付レねば軍ハ中〳〵致されざる事ト知べし何レにも子弟（コドモ）の悪きハ父兄（チヽアニ）の愚朦（バカ）ニ極り臣下（ケライ）の悪きハ主君の暗愚（ベラボウ）ニ皈スル事ハ人主たる人ハ眼目ヲ開て工夫あるべし必ゆるかせに思フ事勿レ

○人主たる者不智不術不徳なる時ハ父の代の忠臣義士も新主をうとんじ恨ミて或ハ隠居し或ハ敵ニ属し或ハ其主を討べき心などを起て其家土瓦の解ル如ニ成事ハ和漢古今其例（タメシ）多キ事ハ中ニも近世ニ於てハ信玄父子の様子ハ多ク人の知ル所ハ信玄在世の中ハ二三十余人の大禄士ども心を一ツニして信玄ニ思ヒ附忠義全かつたし故北ハ上杉南ハ北條の両大敵ありしかども甲上信の三國江敵を一

人も入なてびして一生を終しに信玄死去有て勝頼の代に至て僅（ワツカ）二年の間に信玄時代にハ鬼神を欺き忠義金鐵の如クなりし勇士等急に心機なるゝ勝頼を恨怒て急（イソイ）て討死を致し或ハ身を遁レ或ハ敵に屬し或ハ主を討べき心起りなど仕（レ）ける故武田家急に滅亡したヿ是他なし其主、徳術あれば其臣忠義勇敢也其主、不徳不術なれば其臣下、不忠不義懦弱也人主たる人、心をそめて工夫あるべし

○大名の貴クして且奢レル身の上のことを知て微賤の卑クして且貧困なる身の上を不知ハ政を知たるが大名とは云難し亦國事も一人にて世話の届クものにあらざる故家老及ビ諸役人を立置て事を司らしむる故自ラ國事に勞せるにも不及ト云ルハ遁辭也是亦國政に心を係ル大名にあらざる也此類の大名も太平の世にも公（ヲヽヤケ）の威德に因て幸に祿位を有ツなれども變あらば忽チ國を失へし慎之

○徳ある國主、術ある大名ハ領國より死ニ當ル罪を犯ス人出来て已（ヤム）事を不得、是を斬（キル）時ハ其斬（キル）の日ハ整服正坐して已レ不徳なるか故ニ領國より犯科の人出来ル事を恥悔（ハヂクユ）て田獵及ヒ酒宴等の樂遊禁して只慎り然ル故ニ如此なれハ大名の領國ニハ犯科の人少之ハ亦ケ様の事ニ慎なき、大名の國中ニハ犯科の人日ゝ月ゝニ多クして人を誅し人を放ツ事過分之是を天ニ背クト云ゝハ菑必身ニ可及、慎之

○古より五月五日家ゝニ有合フ昇（ノボリ）小旗鎧冑太刀薙刀等を前庭ニ立列ねて相互ニ見物せしむるハ即チ武具改メの政也然ルニ太平久キニ随て何時（イツ）トなく男児の祝儀翫物ト成て當世ニてハ只男児の有家をかり飾（カザリ）物をせる事ニ成なり然ル故ニ昇ニハ公（キン）平、猪之熊猩ゝ舞なとを画き鎧冑ハ紙を以て拵へ太刀長刀ハ竹木を以て制し甚キハ遊女天狗なとゝれ造リ物を並べ立て只児戯の物ト而已世人一統

抱當作拘

ニ心得なり大ニ趣意を失ル事なり願クハ此末周ク號令して古代の如ク男児の有無ニ不抱家毎ニ正真の武具馬具を飾ラせて互ニ励せ度事ニ候若紙鎧木太刀等を飾リなる者をバ辱ムべし此如クせバ五七年の間ニ天下ニ武器漫〻なるべし此一條大ニ武備を助べき事

附百姓町人とも五月の飾を可禁なれども百年來飾リ來なる事なれバ是ことハ公平猪之熊等の昇なりを許スべき歟

○小子弱年の時、或先生ニ大名の目利ト云事を聞リ甚面白説ニ因て記して以て參考ニ備フ是小子が杜撰ニあらバ実に老先生の口授なり其條〻左の如し

○街ニ上を謗○德術を不勤して妄りニ福を神佛ニ祈リ○不信、不義を國中ニ行ヒ○一年れ饑饉ニ餓殍の者有○國中道橋壞レ損じ○家老及ヒ重キ役人度〻替リ○田獵度なく○直言をなす者を遠ざけ

卽一作等

て諫を不容（イレ）○媚（コビ）ル者を不知レテ終ニ諂
諛の說を容レ○自ラ國政を不聞○百姓
町人ニ度々用金を申付○金を取て賤者
を立身サセ○文武の藝を不好○小祿の
士及ヒ微賤の者を輕シ侮リ○文武の器
量人、不被用レテ下ニあり○賞罰及ヒ是
非邪正の截判不速○己レ一人智ありト
誇リ○婦人の言を容レ用○家中の邸宅
江度々遊行レ○甚短慮（キミジカ）○甚悠長（キナカ）○甚色

を好ミ○甚貨を好ミ○國中賄賂行ハル
右二十四條の内、五ツは容（ユルス）へし、五ツ容ての上
ニ五あれバ太平の世ニても國家はかれて武道
弛（ユル）ミ、乱世なれバ戦弱く十あれバ太平の世ニ
ても士民態背て不服、同列ニも謗笑ハる乱世なら
れバ家中われ〳〵ニ成て一戦ニ其國敗ル十
以上あるものハ太平の世ト云とも國家危シ
乱世なれバ戦を不待して其國滅亡ストあり
右のヶ條を以て敵國の様子を窺（ウカヽ）バ其國ニ不

至其君を不見して貧富強弱（ツヨシヨハシ）悉ク知るゝ之孫子か筭（サン）と云ふも此類の事之ト語レリ小子按ルに実に手短（テミジカ）かな目利（メキヽ）にして又以て戒（イマシメ）とせるに足レリ先生の口授珍かな哉

○夫れ世の中に五難あり饑饉（キキン）軍旅（リヨ）水難（ミツカブリ）火難（ルイシヤウ）病難（ハヤリヤマイ）之此五ツを變にして常式にあらざる故何時（イツ）到来せんも計難けれど此備を致ス事一國一郡を領せん人第一れ心懸あり其心懸にて別の物にもあらず金穀ノ二ツ之此二を貯（タクハフ）ル法ハ二三十年前より其説紛（フン）ゝあり殊に近世徂徠春臺等の諸先生も志きりに演説せれとも不行届其不行届とける世れ華侈（オコリハヘル）にそれて人君執政の心懦（ダ）弱（ジヤク）に成レリ懦弱に成し故身を苦（クルシ）メて倹約をなく事あぬハさなら之身を苦て倹約を致し國家の不経濟を取直ス事の為（ナサ）レさる程の云甲斐なき心にて軍を中ゝ致サせさる事ハ早ク國を渡シて浪人せんと

○今れ世の中にて不経濟をも取直（ナホシ）五難の為

ニ金穀を可貯畜（タクワウ）フニハ古より云ル如ク道理一通リの事ニして、中〻其術行届（トヾ）クもの希なるらん然ル故に身を苦メて倹約を勤されとも金穀を貯ル程の手際（テギワ）を致サレさるヿハ扨身を苦ルヿハ美饌を減シ衣服を悪クシ家作を麁相（ソソウ）ニシ、物入ヲ響（ヒヾヘラシ）ク遊樂ヲ止（ヤメ）嬖妾（メカケ）及ヒ奥向の婦人を大ニ省（ハブキ）贈答（ソウトウ）の音（イン）物を薄（ウス）クシて只不省（ハブカ）ハ公務のヿハ右の如、躬（ミツカ）ラ心を用ル時ハ如何（イカ）なる不經濟も取直シ金穀をも貯て始て武を張へし是人主ハ云ニ不及、小給の士ト云とも此心懸なるへし是を武政の根本トス

○世人ニ定リの返答あり、心有者、武備、或ハ軍陣等の心懸ヲ説けれとも、則曰吾幸（ワレサイハイ）に太平の世ニ生レあり、存命の間さへ干戈（イクサ）の事無ンバ幸甚キヿハ子孫の事ハ又其時の事よと云人十ニ九ハ悟抜（サトリスイ）たる詞ニ似たれとも其実ハ武備無（ナキ）を恥ての遁辞（トンジ）ヿハ斯言（カクイフ）人ハ凡夫の上の凡夫ト云ものハ可恥さて不及なからも天下後世を

患ルこそ真の武備ト云べし學者も亦然り詩文風雅而已ニ走テ世の中を苦ニ為（セ）ざる學者ハ真の學者トハ云難し只事知（シリ）ト耳（ノミ）云べき也

○當世上下ともニ穀を賤（イヤシン）じて金を貴（タツト）フ也其心根、歳饑饉（キキン）して米穀、何程貴（タカク）とも金銀さへ多けれバ買求ル事仕易し此故ニ金銀を第一トして穀を心トせざる也是甚危き心懸也其故ハ三四ヶ國の饑饉なりとも有年（ユメアル）の國より饑饉の國江廻レ遣（ツカハ）ス米穀もあるべけれども若

二三十ヶ國も一等ニ饑饉せバ廻レ遣ス米穀もあるべからず其時ニ至て金銀を煎（セン）レして飲こども命ハ助ル間敷也尤兵乱の世ニハ農民も快ク農作も致難きものなれバ歳饑饉なくバこども米穀ハ不足もなれ也此所を能呑込て金銀ハ命を救フ第二番の物なる事を知て米穀を第一金銭を第二ト心得て平日食糧ニ成べき物を貯ル事ヲ勤ムべし是國郡を領スル人第一の覺悟ニして下庶人ニ至ル迄も此心

懸を忘却スル事なかれ是大ニしてハ武備の國用トシ小ニしてハ一夫の活命トも成所ハ此所、國・王領主より飢〻世話致スベし

糧を貯ル法も和漢古今其說紛〻なれども一槩ニ泥ム事勿レ只國土の沃瘠（コヘヤセ）、其歳の豊凶等を考て臨時ニ分量を定て貯へし大槩凶年ハ三十年ニ一度、大饑饉ハ六十年ニ一度程至ル者ゆへ其心懸ニて可貯

○大将たる人ハ道、天、地、将、法の意味ヲ詳ニ會得ざるべし此ニ暗き時ハ一旦の勝ヲ得ども大業を仕損ル事ありし先蹤を考見べし

○大将たる人ハ伶俐（リコウ）なりとも一人の才力を恃（タノン）て誇（ホコル）事勿レ文武智謀の人を撰て重役ニ任し置て國事（コクジ）、軍事、相共ニ計ルべし是又和漢名将の仕形を見て可知、孔子も無求備於一人ト宣り

○當世武術行ハるゝ様なれども文ニ本ヅカざる故、偏武ニ陥（オチイル）ル者多し、弓術、殊ニ流行せき

こも只ハ奉射の礼式のみを専トして武者軍用の射術ニ蹤（ウト）シ是を逆（ギャク）法トス武士ノ射術ハ先、軍用法を習て後ニ礼射を習フを順（ジュン）法トすへし八十五巻目ニ云ル馬術も亦然リ此心持を呑込て射術を教ル事大将ノ器ト云へき也

○兵を出スニハ先敵将の賢愚（リコウバカ）、政務（ム）の善悪（ヨシアシ）、武備の強弱（ツヨシヨハシ）、國郡の大小、土地の寒、暖、人数の多少等を預メ推計て此方よりも相當の謀を致シ、相應の人数を遺スへし是を兵の（ミナカンヨウ）算（サン）ト云也算無して兵を出ス時ハ不覚を取ものなり故ニ算ハ兵を用ル肝要なりト云リ然ル故ニ孫子ニ多算勝、少算不勝而況於無算乎ト云リ、始ニ云レ大名の目利（メキヽ）ト云事も則算の事也

○大将たる人ハ俗事、時行事（ハヤリコト）の類ニハ能心ヲ附、又ハ陰陽家の説、五行の生尅又ハ佛語神託の類も軍事ニ余計ニ学ヒ置へしたゞし実用無（ナシ）ト云こも人を使フニ便なるもの也古も例多き事也

○惣て兵を提ル者ハ始ニも云シ如ク和漢ノ軍談記録を多ク見て名将の軍なるを能〻味へて損益斟酌あるへし地形城池等又ハ武具馬具杯或ハ鎧の縅毛旗指物の制法或ハ戦場の立振舞言葉遣なと詳なるは如はなれとも常人是をなせる時は本意を亡失ス只ハ廣ク大本を知を要トすへし

○大将の士民を扱フ事甚趣意あり温和にして柔を過ル時は士民柔弱にして精力称一ならは亦辛酷にして猛ニ過ル時ハ士民離レて不親或ハ怨を生スルハ韓子にも猛毅之君不免外難懦弱之君不免内難ト云り都て柔弱にして心よき時は下たる者徒に上を親のみにして物の用に立難シ喩ハ蜀の先主の柔徳の如シ亦離レて不親時ハ人怨背て長久を保事なかるへし喩ハ楚の項羽亦ハ織田氏なとの如シ此二ツを能會得して寛仁以て親を厚クシ威厳以て人を畏服せしむる事良将の能なり

ト知へし子産ガ寛猛相済トいふも此事之へ

○物本末あり事終始あり兵ニ将なる者の本末を云ば人を扱フ事本ニして城池着具の事などハ末なり亦血戦の一事を以て云時ハ強き事本ニして詰閲（ツメヒラキ）の態（ワザ）等ハ末之都て事本を能會得して末を大畧ニすべし、孟子の天時不㆑如㆓地利㆒、地利不㆑如㆓人和㆒トいふも人和ハ軍法ノ本ニして天時城郭等ハ末之ト云事之へ是を軍家第一の秘訣ト知へし

○一不徳ニして不埒不取固りなる大将の家中ハ家老及ヒ末々れ諸役人も同シ不埒不取固りなれど國家の不経済も心ニ不苦、金穀の政をも不知、武備の衰微、士民の究困及ヒ悪風、又ハ盗賊れ蜂起もはをも道橋の壊損シ抔迄、心憂（ウレ）ども不思して只家老ら身分高シとて一家中ニ誇り、亦面々れ頭々ら其支配々ニ誇ル而已ニして上の為をも不知、下の為をも猶不知、君臣共ニ只飲食田猟等れ事ニ年月を送ル

之ハ可レ悲れ第一なりにや此等の家士を物に諭レば糞中れ蛆の如し、夫糞蛆(クソムシ)ハ糞中に生レ糞中に長じ糞中を一生の住居(スマヰ)トせば故糞蛆の穢らハしきをも臭キをも、穢ハし臭しト不思して一生を送ル之ハ是を清(キヨ)キ處に住(スム)虫より見レば其穢ク臭キ事、言語道断之ハ彼(カノ)不徳不埒家れ諸役人も他の善大将の家士より見レば浄處に住(スム)虫の糞蛆(クソムシ)を見ルが如し其清穢賢愚、天地懸隔之ハ不埒家の君臣察之

○将の五事とハ道天地将法之ハ委キ事ハ孫子に言り

○将の五徳とは智信仁勇厳之

○用兵の五法とて兵を出ス趣意五ツあり一ニハ敵國の政不仁にして下苦ムを討、一人を殺して万人を救フ之二ニハ敵國の君臣不義無道なるを討、三ニハ君父の讐を討、四ニハ敵國の君不礼にして徳を破リ他を侵スを討、五ニハ君徳廃して上下混乱せるを討、是を五法

ト云之

○将ニ十過アリ一ニハ己レ剛強ニシテ妄ニ敵ヲ侮ル、二ニハ臆病ニシテ能（ヨク）敵ヲ怖ル、三ニハ己レ伶俐（リ）狡（コウ）明ニシテ人ヲ軽シ侮ル、四ニハ愚（ヲロカ）鈍ニシテ毎事人ニ任ス、五ニハ貪テ下ヲ掠ム、六ニハ偏ニ潔白ニシテ人不懐（ナツカ）、七ニハ不仁ニシテ下ヲ不恵、八ニハ短慮ニシテ且ツ分別淺シ、九ニハ緩（ユル）怠ニシテ利ニ不進十ニハ猶豫ニシテ理不盡の御分別ハ、是非の事可慎謹

○将ニ上中下アリ上将ハ智ヲ以テ勝ヲ制シテ勝ヲ刄ニ不借、中将ハ兵ヲ以テ勝ヲ制シテ奇正分合能圖ニ當ル、下将ハ刄ヲ以テ勝ヲ計テ兵ト智トヲ不知之中古、尊氏卿ト楠正成ト新田義貞トヲ見ルヘシ尊氏卿ハ始終智ヲ以シ正成ハ始終兵ヲ以シ義貞ハ始終刄ヲ以ス是此三将の上中下之

或曰何ヲカ尊氏卿の智ト云ヤ對曰北條高時繁昌の時ハ鎌倉ニ参勤シテ高時の

縁者ト成て他家なれとも一門同様に奔
走せしむる一ツの智ハ高時度々兵を出し
て合戦ありしかとも尊氏卿一度も軍に
趣かれぬる事なし二の智ハ七枚起請を
書て高時を安んし速かに鎌倉を発ス三の智
ハ天皇に忝ルの後醍天皇を嫌（スカレ）て官禄共
に義貞正成圓心長年の四功臣の上に立
四の智ハ既に天下の武将ト成べき望あ
りし故其妨に成へき者ハ大塔の宮ト義貞
ト正成ト圓心の四人なれば悪き事を不知
して先大塔宮を讒（シコナ）て牢獄に下し奉り義
貞をも色を以て武威を鈍（ニブラ）かしむべき為に
准后に手因て句當内侍を義貞に賜らせ
圓心をも天皇を恨ミ奉て反心を生せしむ
べき為に播磨國の守護職を召放サせば
様に風奏し正成ハ正直の忠臣にして且
小器なる事を知玉ヒし故敢て讒ル事も
なく只厚ク遇して不恭せさる是等の事五

の智之ハ鎌倉ニ於て時行ニ勝て其機をえ
ければ直ニ征夷大将軍ト名乗レシ事六
の智之ハ箱根ニ於て義貞ニ打勝て不取置
京都江攻上られし事七の智之ハ京軍ニ大
ニ敗北せし時ハ畿内近國ニ片時も足を
不留、飛が如ニ九州迄逃下られし事八の
智之ハ逃ながら院宣を申受て天下を君ト
君トの御争ニ為（ナシ）て已レ朝敵の名を免レ
なる九の智之ハ九州江逃下て落人の身な
がら少貮大友等の大諸侯を急ニ皈服せ
しめし事十の智之ハ湊川ニ正成を討てし其首
を獄門ニかけれバ却て本國江贈て葬送せ
しめ其上、楠家の分國、河摂泉の三州江ハ
必手を入ましト云送て楠家の心気を撓
めて敵を少ゝもはれ術を施ス十一の智
之二ハ京都江攻上て天皇及ヒ義貞等を
叡山江追籠て後さしのゝ大攻をもせずし
て百余日を過シ天皇及ヒ諸官軍の気の

弛ミを察して天皇江和睦を乞奉り下山なし参らせて又ニ血ぬらずして叡山を落したる十二の智ハ義顕の首を得て事ニ献梟首ス十三の智也天皇京を逃て南朝を建立志玉へとも其成就為まじき事を知て襲ハず十四の智ハ是等の事尊氏卿の智ト云べきハ此外和漢古今大将たる人の所業を鑑て能其上中下を會得して後の将たる人も上の地ニ可至事を希へし

○多ハ少キニ勝、強ハ弱ニ勝ハ自然の理なり然ル故ニ一國一郡ニても主たる者ハ人ヲ多クシ人ヲ強クする術を知べき事兵家第一の肝要ハ故ニ孔子も子貢ニ對て足食足兵ト宣イ冉有ニ庶、富、教を語り玉へり能ゝ可思扱人を多クするも強クするも武士を土着せ志むるニあり武士土着すれバ奢侈なし奢侈なき故貧困せず貧困せざる故、祿ニ應して普代の家の子並ニ武具馬具等心懸次第所持せらるべ

其上ニ武士土着セれバ山林ニてハ鳥獣を狩
水邊ニてハ漁獵し又平生馬ニ乗て馳驅セる
故自然ト馬術ニも達し又遠方の人ト互ニ往
來セる故山川の悪路ニも習ヒ筋骨形躰勇壯
ニ成故真ノ武士ト云へし普代の家の子多ク
所持セしかゝ故軍役も多しト知へし
○古ハ兵を農ニ取レり此故ニ兵の數今世ニ
競(クラブ)レバ二十倍セり中古以來士ト農ト分レて
兵を農ニ不取此故ニ兵の數大ニ減少セりて然
レども武士皆土着なりし故今世ニ競レバ十
陪セり、天正以來、武士土着セずして城下詰ニ
なれて此故ニ兵の數、又大ニ減少して中古よ
りて見ても十分の一ニなれてト知へし（備前の三万の里の）
由來なご考合て農兵
の多キ事を知へし願クハ武士を土着ニし
て普代の家中を多ク扶持セしめ又地頭領主
の心得次第、百姓を兵ニ仕立ル術ハあるへし又
坊主、山伏等をも組ゝを立て軍兵ニ用ユへき
事將帥の方寸ニあるへし如此、心懸(カケ)て兵の數、

上古の多キに復(フツ)スへし然レとも二百余年の
仕癖(クセ)なれハ急速(キウソク)にハ革(アラタメ)難シ初メにも云如ク
○二十年を期トして改革せへし
一二十年を期トせる事是迄ニ(ミヽと)云り然ルニ
日本れ騒(サハカシ)キ心気にて迂遠に思て不勤、却
て唐風又ハ學者風なとて訇(ノヽシリ)て呑込さる
人多けれとも是ハ軽薄の風俗に任せて
實地の性を修せさる故ニ唐山及ヒ阿蘭
陀莫斯歌未亜(ムスカウヒヤ)等の大事を成(ナス)を聞に二十
年ハなおろか五十年、百年、三百年を期
トして思ヒ立事なり然ル故に五代も十
代も経て祖先の志を成就せる事なり是
皆國政の宜ト人心の堅実なるトによるか
事ニ可ㇾ羨、可ㇾ思

○上にも云如ク士に大禄を與ル事ハ其禄に
應シて倍卒を出サしめて軍役に充ル事ニ然
ルに當世の如ク武士土着せさる時ハ華侈盛
に成て士大夫悉く貧窮せる故軍役の人数も普

代にして召使フ事なりけれバ只ハ一季二季の渡り者を召使フ之へ成程太平の日にハ軍役程頭数（カズ）ハあるやうなれども干戈（イクサ）動クの時ニ當テ命危き場所へ召連バ主（ダンナ）の先途（センド）を見継（ツグ）者ハ十に一二なるへし然ル時ハ二三石の足軽も己レ一人二三百石の士も己レ一人となるへし是普代なくしてならざる故之へ（普代の徳の事ハ十四巻目人数積の所に精し）然ル時ハ士に大禄を與ルハ益なきに似たる也又當世ハ五百石馬一疋万石十六騎と覚へたる人モ多ケレ甚謂レなき様ハ武士土着せざる時ハ五百石の禄にても馬の二三疋若黨の七八人十人乃至二三十人も出サレ万石にてハ騎馬の五六十軍卒の七八百千も出サるゝものへ是等の事ハ土着の様子を知されバ當世武士ハ心得難き事に思フへし土着を持（モテ）ル大名の家士に聞て小子が言の妄にあらさるを知へし

○大将たる人ハ和漢の軍談記録の書を多ク

讀べし自然ト名將愚將の巧拙の段、合点ゆくもの也、能此所を呑込て損益斟勺せず骨折(オリ)て一流二流の軍學の傳授受たらんより益多かるべし思べし

○大將たる人も文武兩全なる事を欲スべし和漢大將たる人多けれども文武二ツながら備レル人少也異國にも武王、呂尚、孫ノ管仲、漢の二祖、蜀の孔明等か 日本にても
神武帝ト
神祖の二君なるべし後世に於てハ莫斯歌未亜(ムスカウビヤ)の女主なるか（日本正德の頃の國王なり）此女主五世界に一帝たらんト志て德を布(シキ)武を張テ今數代ヲ經テ其令不弛也、文武兩全の棟梁ト云べし都て大將たる人ハ不及迄も右躰の事ヲ心懸べし是心術ニあり若亦一等ヲ下ラバ義經の短兵に長也、甲越二子(シンゲンケンシン)の士卒を練(子リ)、大閤ノ猛威清正の突戦(オヒトイクサ)の如きハ皆一箇の妙處也、其妙處を撰て己に兼備ル事を欲スべし是亦大將の

志氣ト云ヘし

○大将たる人威なき時ハ衆を畏服せしむる事不能之、それ威ハ法を厳にせばト大を誅するトなり亦明なき時ハ衆人の勵薄ク又怨を生スル事なり能小功をも賞するを以て明トス此二ツのものハ大将たる人第一の徳也

○古の名将皆一騎當千の士を總（チシコロ）に召使イ自身の堅メトして旗本に備なり漢ノ高祖の樊噲、周勃、蜀の玄徳の關羽、張飛、趙雲、頼光の四天王、義経の八勇士、義貞の十六騎、正成の二十八人黨の如キ皆中堅（ナカゴ）の為ニハ将たる者心得あるへし軍家にあらずご、身かハゆめ抔ト云も此事ニハ

○馬の乗様、亦飼立様、大に古法を失へり詳なる事ハ十五巻目に云ルが如シ是亦軍（イチザゴト）務の大主意にして不可忘の第一ニハ

○都て軍ハ大勢の人を一致して用ル事ニハ大勢を一致せは事ハ法を立て縛（レバ）ルにありされども為（ナシ）難事ニハ然ル故に善兵を用ル者ハ法を厳

にせり武王れ四伐五伐の法をて始りとて孫子が美人を斬（キリ）司馬穣苴（シヤウシヨ）が莊賈を斬、曹操が自身の髪を切たるは類、皆名将の法を貴フまけ〻法をゆるかせにするハ愚将ト云なし日本にて名将ト称スル人多シト云とも皆天授の才のミにして学問なき人〻なる故皆通達の義理にうとく只勢を専ばして法を立ル事を知さる故其軍立麁一なくじ堂〻整〻れ威儀を失り威儀を失ルのミなくじ不意の破レを取るはためしも多シ是法を不重セ故ト知ベし

○軍ハ不意にして神速なるを貴フ韓信木罌にて水を渡て魏豹を破り義経鵯（ヒヨドリ）越を落シて須ニ人を破り渡邊を渡て八嶋を破り義貞一夜の中に評議を決定して鎌倉を踏破ける類、皆機を知て危（アヤブ）まじく是等を兵家の妙機ト知ベし

○大将たる人ハ戦法、戦畧、兵器、守攻の具に至ル迄、時宜の工夫一箇にて如何様にも臨機應

特ー武士ノ心國直旅ハ也是技ヲ自ヲ弓ト下練三十四十五三多中練二節鎗六十三ハ毎月下クリ土錬是ニヲ中定ハ置セソ兵士ヲトニ七ハ人撰テ邑ロノ社治ヲ豊月ノ中唐山ハ法

變して取廻スへし、正成が油をそゝぎ懸て鎌倉勢の梯（カケハシ）を焼落し、赤啼男を出して足利家の軍機をゆるべて不意ヲ討、織田氏の長柄を制作して強を取、島津家関ヶ原退去の時、戦士に種が島を腰差にさせて退口に利を得たる類、皆将たる人ハ臨時の権謀にて兵を提ル人心得あるへき事也

○善（ヨツ）兵を用ル者ハ、敵を見時ハ、士卒闘べき事を願ひ、既に刃（ヤイバ）を交ルに至てハ士卒進て死べき事を願ひ、引鐘を聞時ハ、士卒怒ル是等の事皆大将の才術にある事也、此故に傳に曰、説以先民、民忘其労、説以犯難、民忘其死ト云リ、其説スルの道大将ノ方寸にありト知へし

○兵器多シト云ども古有て今絶たる者あり、今盛に行ハれて実用なき物あり、能彼是の間を弁じ、絶たるをば興し、無用なるを捨べき事是亦大将の器量にあるへし

○唐山（カラ）の古ハ、振旅（シンリヨ）、治兵（チヘイ）、操練（ソウレン）など云て兵馬を

唐山ノ法農民ノ中ノ壮者ヲ撰テ邑ゴトニ七八人ヅヽ兵士ト定メ置也是ニ上中下アリ上練ニハ毎月給銀六十匁中練ニ四十五匁下練ニ三十目ヲ与フト也是我ガ国世禄ノ武士ノ心持ニ

集て軍の稽古ありしハ尤今世にても其法不絶して諸國に毎月軍の稽古あるなる由、明和の頃唐山（カラ）江漂流して無恙皈りし者共の直に見たる事之

日本にても古ハ都にも鼓吹司を置、國々にハ軍團を置て軍の稽古をなさしめ其上ミに犬追物牛追物等有て人馬の足場揃度ハ有し事なれども近世ハ絶果たり當時相馬家の妙見祭吾か藩の巻狩等ハ古の遺風にして猶治兵操練に似たる事なれども怨ムらくハ其法粗畧之ハ然りと云ども亦講武の一端なるへし是に加ルに一二の精法を以てせバ真の治兵操練とも云べし大将たる人憤発有て此等の事諸國に始メ度事なる哉

○當世ハ弓鉄炮、長柄等の組を分置て弓組ハ鉄炮を不知、鉄炮組ハ弓を不知之ハ如此なるハ一方利（キ）にて不自由なる教方之ハ弓鉄炮長柄等ハ其組々をそ分置ども稽古ハ弓鉄炮長柄等を交（マジヘ）教て両用ニ仕込置度事之ハ是亦大将の器

量次第なるへし

○諸軍家ニ陣中江召連ル役者ト云者あり其品類家〻ニて差別ありト云ども大槩ハ醫者、儒者、出家、猿樂、金掘、算勘、弓工、銃工、鍛冶、漆師、塗師、咄之者等之、此中、猿樂、咄之者ハ無用の者ニ近ければ省(ハブ)くども害なし出家も無用の者ニ近けれども討死の者を取仕廻ハ然る役ニして死を重じ人望ニ背く間敷為の道具ニも致し又ハ敵方江使の役ニも使フ事なれば可ニ召連ゆへ其外の工人ハ皆有用の者ゆへ省く事勿レ然ルニ當世の如く弓師も弓師、鍛冶ハ鍛冶ニて別段ニ職人ト称して召抱置ハ無術の一端なるへし大将の心懸次第弓鉄炮鍛冶漆師等を足軽の兼役ニ仕附置べし尤武士たりとも此等の細工も仕覚居ル様ニ教べし元禄の頃迄も草鞋(ワランジ)馬沓(グツ)を拵(コシラヘ)得ざる士をば相立ず嘲(アザケ)りける由聞及り扨又儒者、陋学(ハカクモン)の理屈者ハ物の用ニ立難し、理屈を離レて至ざるニ達し博覧ニ

して多ク事跡を知リたる者を用へし

○當世焔硝、硫黄等ハ皆商賈(アキビト)の手より買求ル事ニ成て金銀さへあれハ不自由ニ無之ものト思フ人多シ然ルニ干戈起ル時ハ商賈も通ぜざるものハ其時ニ至てハ自國より出ル物ニあらざれバ、一向ニ行詰ル事ニ是又大将の世話ニして焔硝(エンシヤウ)硫黄(イワウ)鉛(ナマリ)篦(ノ)竹の類ハ自分〱の領國より取出ス様ニ世話あるへき事ニ

○今の大名ニ諫役の大臣無之故、君公其身の非を不知ニハあらましく思切て諫ル者有ば忽チ不遇ニ成て職を剥(ハキ)、禄を削て、恥を與ル故自然ト忠臣の道を塞て、只今日君ニ得ラるゝ事のミ言て日を送ルニハ此故ニ君不君臣不臣の國多シ願クハ万石以上の大名ハ諫役の臣を定メ置て何程君の心ニ碍(サハ)ル事を言上ニても決して罪スまじト定格を立置て諫メさせへし自然ニ自身の非を知ルニハ非さへ知レば國家の幸ト成ものニハ可思○又一ツニハ別ニ諫役

を立ルにも不及之家老職の者にも少も無會釈諫め、若諂（ヘツラウ）て不諫者をば罷ス卜申渡し置べし亦家老ハ同役一統の云合セにして能心を合セて諫ムべし不諫者をば同役より言上して職を剥べし是を國家の定法卜せる時は上下各非を知て家齊り國治ルべし誠に此如クかくてハ一身の為而已にあらず〻公儀江の忠意、領國江の憐愍、文武の基本此事に過ぬるはなかるべし大将たる人能々了簡して諫言を求ムべし怠ル事勿レ

○國郡を領せる者ハ各其領國の天度れ寒暄を能了知して其手當を致スべし然レなから三十五度より南の地ハ暄カにして春夏の暖暑早ク至て且強ク秋冬の冷寒ハ遅クして薄キ故、麥に雪朽なく稲に青立の患なし其外草木生茂仕易キ故、産物も多クして金穀の収納多キ故、國家の経濟致シ易シ亦三十六七度よりも北の地は寒キガ故に春夏れ暖暑も遅クし

了且薄ク秋冬の冷寒ハ早ク来て強キ故麦ニも雪朽多ク稲ニ青立多シ其外艸木生茂仕難キ故産物も少クして金穀の收納少キ故國主も貧乏仕易ク諸士も貧乏仕易シ上下貧乏すれば上下の武備弛ムハ寒地を領する人能々心を用べし心を用ルとて外の事ニハあらず寒気ニ負(マケ)ざる草木を仕立て國産を多ク仕つけ國用をも足シ通商をも多クして宝貨を賑(ニギ)ハす様ニする事ニハ扨暖地ハ草木生茂仕易キ故世話次第何等の物も仕立ラるゝハ三十六七度以北の地ハ草木生茂仕難シ推(オレ)て植ても柯(カラ)れやかて成長して実(ミノ)らざる物あり実りても真の実ニならざる物あり都て暖地ニ比すれバ生茂虚実半バなるものハ心を用べし、まづ寒地ニも生茂仕易キ品ハ木ニハ榛(ウルシ)（実を蠟ニ作　汁を漆ニ作）桑（蠶を養て結綿を作）楮（紙ニ作ル）此三木ハ寒地ニも生茂仕易クして用多キ物なれバ寒地の宝ト云べき物ハ（三木ハ山野川端街道端或は屋敷境畠境等ニ植べし此外ニ胡桃榧(カヤ)）

子ハ珍菓を家毎ニ植置て実の油を取て居家自用ト爲べし（珍菓ハ奥州ニ産せる木之大倭本草ニシラ木ト出せり本草綱目ニ婆羅得ト云物是ありト云リ）草ニハ麻之寒地ニハ木綿不生故皆他邦の木綿を用レども自國の宝貨他邦（江）流レ出て自國の不経濟トなる之此故ニ寒地ニてハ自國ニ産せる絹ト麻（アサ）布ト紙子ト紙布（フ）トを用て他邦の木綿を禁せる事寒地の一経濟之へト知べし○都て國ニ産物を仕立ルニハ良田を不妨、壮男女の力を不費、只老人癈人小男女等の農業を不勤者の仕業ニ為て集て大成せれど大國産ト成之然ルニ不呑込なれど良田を費し壮男女の力を用て産物を仕立ル者なり宝貨ハ通用して賑ふ様なれども五穀不足ニ成て大ニ不好（コノマ）事之此所能く心を配ルべし扨又右の産物の外ニ諸の細工物を癈民并ニ諸家中迄ニ教て多ク造らしめ國用をも足し宝貨をも賑ハしむべし既ニ六韜ニも大農大工大商を三宝ト云リ詳ニ工夫有べし

扨如此國を富せ人を富ス事を演説するも武を張べき為の事之何程國君より命令有ても亦ハ人〻心八丈（ヤタケ）ニ武を好ても貧乏なれば武を張ル事ハ不成之國家ニ武備なきハ國非其国ト云もの之然ル故ニ唐山（カラ）古聖人の政も農ト儉トを教て國を富シ人を富せて武を張べき事を第一ニ教、阿蘭陀の政も其国寒地ニして五穀産物不豊（ユタカナラ）、故萬里の外国江通商して諸邦の宝貨を己レカ國江取入レ大商の道を以て大ニ其国を富せて悉ク武を逞フし小国を以て大国ニ損（ハサマレ）ありし千八百年来一度も他邦の兵を受ケぬる事なく其上遠ク萬余里を隔ぬる呱哇國を切従へて己レが有ト為シ又亜墨（アメ）利加洲の中ニ於ても一國を切取て新阿蘭陀ト名づけて己レが領國ト為せて羨哉勇哉可思可思

○國君ト家老ト不学無術なれば國家貧乏ス貧乏すれば領国中、川除の普請おろそかに成

おろそかに成故年々夏秋の小洪水にも押切ラル押切らるゝ故田畑水押（オシ）に成て永荒（アレ）の地年々出来ス是貧乏の上に又収納の不足に成ル一ツ之亦橋々の普請もおろそかに成おろそかに成故是亦年々の小洪水にも落橋ス此故に領国中、数多の橋ゝ一年に二三度づゝ普請ありて普請の度毎に大橋ハ人夫三四万小橋ハ人夫五六千宛役シ且過半銭取立にせる故百姓力不足して、天凶年ならざるも田畑不毛

之是収納の不足に成二ツ之ハ此二ツに百姓労（ツ）レて農業を樂ン不思故、いそこかく農業不務（ツトメ）に成て百姓も貧乏なれば故、或ハ地迯を為て他邦に移ルもあり或ハ農を捨て商に成ルもある故、郡村の人別減少して田畑愈荒亡ス是収納れ不足に成三之収納愈不足に成て公室愈貧乏なる故、毛見ト称シて姦吏を村里江遣シ年貢を責てかゝる、責てかゝるれど百姓等彼れ姦吏に賄賂して上作をも下作ト披露シ諸百

姓年貢を缺少ス是收納の不足に成回此回は不納を以てハ公室又愈貧乏なる故家中諸士の俸禄を借ル一年借りて不足故三年も五年も借ル、三年五年借りても不呑込而已（ノミ）働として貧乏を取直ス事不能故綿〻トして三十年も五十年も借りて常となる故家中諸士悉ク貧乏して禄相応は武備を張ル事不能のミならず普代相傳の家人にも暇を与へ亦々有来ル武具馬具等をも賣代（シロ）なして日用相續の助トなる故諸士の武備弛（ユル）ム、武備弛て人心惰弱し人心惰弱に成ば義理を捨法を不守して一統に無頼不法の風儀ト成て國家終に傾クハ是全ク國君一人は賢不賢に係ル所にして天は從にも人の咎にもあらざるハ可思、扨能考レバ大名の貧乏は心蕩（トラ）ケて武を忘レぬるより事起ルハ大名の武を忘レぬるは幸に太平の世に生レて高位大禄を有（タモテ）るも尸位素餐（シニ大ミヤウムダクイ）ト云ものハ恥キ哉悲キ哉

○上ニ云所の天度の實瞭又ハ國土ハ經濟、文武ヲ勵ス筋道迄能呑込ありども己レ一人知得ル耳（ノミ）ニてハ物ハ用ニ立難シ其國の上下万人皆知得て皆勤ルニあらざれば善の善ニ非ルハ是ヲ為ルの方ハ其國ニハ實瞭の手當の事并ニ産物細工物等の仕立方、又文ト武トハ不廢掟トヲ精ク部分ヲ為て修法ヲ記シ是ヲ其國ニハ國学ハ書ト定メて假名書（カキ）の公板ニシて其國ニ周クシ國君、家老、諸士、庶人、迄能其國学ハ書ニ通達シて能行フ様ニ教べし縱令如何なる藝能ありども此國学の修行なき人をば罪スべし是人ヲ恵ミ人ヲ富シ國ヲ利シ武ヲ張の術ニシて國家の堅固なるべき所以（ユヱン）なり然ルニ文あれども武なく武あれども文なく又文武あれども是ヲ國家ニ及シ人ニ施ス事の不成ハ其一ヲ知て其二ヲ不知ト云ル不具人（カタワモノ）之ト心得べし是等の輩小子が妄言ニ非ス皆聖賢の遺旨之能ク工夫あるべし

○古昔兵を論すれは者数家あり卜云ども七書に不過其中にて兵機の勝レたる者ハ孫呉の二書也然レども兵機をかつて言て兵の大本を知ト云ものにあらず其故ハ兵の大本ハ國家を經濟すれは為なれハ治國安民の道を不知ハ真の兵家ト云難シ此故ニ古昔の聖人黄帝堯舜禹湯文武周公皆軍の名人也其證據ハ黄に握機あり舜禹に三苗有苗の征あり湯武に桀紂の放伐あり周公に司馬法あり又此外晋の六卿魯の三家齊の管仲が輩治平の日ハ文を以て國を治め乱れあれば戎車に駕して征伐ス如此なれハ文武一致なれハ故大本を知レル兵家ト云へし後世文ハ文武ハ武ト別物に成なれハ故其用ヲなせ事一偏にして不自由に成なり其上春秋の頃もしや太本を忘却して宋襄の様なれハ人あり漢にも陳餘が如き不呑込の人出て聖人の道を借て兵を誤ルより聖人の教ハ兵の用に不立物卜思フ人多シ是大な

る誤なり仍て此所を得ト呑込で真の兵家ト
ハ云べし七書の中にても此所を述たる[illegible]もれ
ハ太公望が六韜、黄石公が三畧之ハ（孫呉ハ兵機一偏を述此
二子ハ文武一致の趣を述たり）亦後世此境を合点したる人
ハ漢れ二祖蜀の孔明唐の太宗我が
神祖の外なし是兵家第一の秘訣なり此境
を能會得すれば太平の世にも廊廟に居て王
伯の業を興シ干戈の間に立ても兵士を提て
臨機應變すべし如此なれば実に先王聖人の

兵ト云之故ニ此下ハ國家経濟の筋を述て兵
心印ト為之ハ能々工夫を附べし茲を以て古ハ
止戈を武ト云ことハ云り然ながら後世の兵れ
[illegible]わりさまにても戈を止ル事も不成之ハ後世れ
武ハ只城を抜人を屠ル事ヲ勤ルを上手トス
是楚の項羽、木曽義仲の類之ハ武なれば事ハ武な
れども兵の大本に不叶、実に一方利（きく）の不自由
なる者にして先王聖人の大に忌嫌所夫武
に神武ハ威武ハ凌武ハなり能々工夫を加へ此趣

意俗見ト大ニ殊ニ人ハ思ヘリ

○天下國家ヲ主とする人ハ經濟の術を知へし

夫經濟トハ經邦濟世ニて經ハ筋道の事邦ハ國ハ國ニ筋道を附ルを經邦ト云ハ濟世トハ濟ハわたす事ニて此（コヽ）を彼（カレ）江渡シ彼を此江遣ス事ハ世ハ世の中ハ世の中の人のすまひ易キ様ニ世話をするを濟世ト云ハ先ツ國ニ筋道ヲ附ルニハ士大夫農工商ニも士大夫農工商の筋道を附、山沢河海田野ニも山沢河海田野の筋道を附、牛馬畜類ニも牛馬畜類の筋道を附ル事ハ濟ニは第一ニ人ハ其處を得ル様ニ世話をする事ハ或ハ士風奢て武備弛（ユル）ム時ハ奢を抑て武術を引立ル様ニ世話致シ或ハ米穀の貴賤常ニ過ル時ハ其直常ニ復する様ニ為、或ハ士大夫貧窮すれハ富ス様ニ為或ハ商賈の利強けれハ其利を抑て利權を奪或ハ地の利を盡シ亦ハ工商の利ヲ取立て國を富ス様ニするなと事柄皆世の中の人のすまひ易キ様ニ

世話をする事にて済の持前なり此二ツを統（スベ）て経済と云之ハ扱経済の大趣意二ツあり封建と郡縣と之ハ唐山（カラ）にても夏殷周の三代ハ封建にして秦以降郡縣と成て今の世迄不變革日本も古代ハ郡縣にして今の世も封建之ハ封建とは國々に大名を建置て其國の政事仕置等ハ其國主〳〵にまかせて公儀より世話せさる事なり郡縣とハ大名を不建して國々へも公儀より国の守（カミ）を遣して其國郡の政事仕置を司ラしむる之ハ封建の大名ハ子孫相継て幾代も其國を持すれバ國の守ハ三年五年にて交替をする事之ハ封建も公儀より土地を分チ賜テ大名ハ共に天下を守り郡縣ハ土地を不分賜國々を役人持にして天下中の世話を公儀の役人に致サする事之ハ経済の大趣意此二之ハ扱二ツの中優劣を評すれバ皆時勢の然しむる所にしてさのミ優劣を不可レ論、然と云こと分明の韃靼に奪レたるか如キ其時に當て封建の大

諸侯数多有之ども、共に義兵を挙て胡軍を討、烏金王をして唐山の主とハ不可為、此時に當てこれども諸侯の無を失とせば似たり又一統とせば人は身に取て見れども諸侯の無を得とス、然レども此二ツは優劣ハ時に取ては得失も可論、頗る不可論扱

日本にて経済の形の出來るは多クも唐山の唐は代の制度を受学り此故に王代の古も郡縣の政にて久ク年月を經レ所に頼朝卿天下の権を取て始て諸國に守護を置てより國は守の威勢日々に軽ク成レリ其後北條氏執権として威を専に為よて何時トなく戦国の機出來り、国々は守護を云ニ不及、大庄を所領して大名ト称スル者及並躰の地士に至ル迄誰許ともなく武偏次第、切取次第、所領せば事に成行、漸々に廣大に成て子孫相継て其土地を有て此度封建にても無亦郡縣にても無して三百余年を經レ所に

神祖天下を一統為玉ひて四海の封境を正し二百六十余人の大名を建玉へり是よりして堂々たる封建の世と成レりと知べし扨又十四巻目に言所の兵賦の事ハ軍法の大本にして千言万語皆此に歸スル事之能々考見べし當世とても軍役の定メハ國々家々に有之と云ども多クハ大本を不知ル人の制作なれバ其法粗畧にして精詳なるもの少（スクナ）けれバ用ルに不足もの間（まゝ）有之別に工夫制作をなして定ム

べし大将たる人必ゆるかせに思事勿レ

○日本にて名君名将と称スル者上古ハ暫不論中古以来を以て言時ハ源義家鎌倉の頼朝卿源義経平時宗同泰時室町の尊氏卿新田義貞楠正成甲斐信玄越後謙信平君織田氏豊臣太閤加藤清正等之此数将ハ皆抜群の功業ある人々なれ共何レも文武両全と云難し此中頼朝卿ハ大器之一也鎌倉に馬を入玉ひより終身鎌倉を不出して居ながら海内の大小名

を来服せしめ終ニ國躰を一變して武徳を以テ天下ノ主となり鴻業ト云べし惜哉世を早ク去玉ル事を次ニ尊氏卿大畧の才有テ能當世の情ニ達シ天下の武徳ニ靡（ナビク）べき事を不知して抑揚褒貶機を失ハされし故、非義不作法多シリ云ども人能寄偏せり此両主ハ戦闘の道ハ下手なれども能大名を得たり所謂将ニ将たる者ト謂べし此故ニ一タヒ兵を挙て天下響の如ク應シて大業速ニ成レリ時宗泰時等ハ軍國の術者ニして小徳之勉（コレツトムル）小恵之行ヒ父祖の相傳ニあらずんバ何ゾ會首たる事を得ン只時宗ガ元（ゲン）の使者ヲ刎（ハネ）シハ一代の手柄ニして古今希有の英気ト称スべし義経ハ小拝合ニ妙を得て善敵を破レリ就中摂刕ニ鵯（ヒヨドリ）越を落シ大風ニ渡邊（ワタナベ）を渡シたるハ絶妙ニして凡慮の及所ニあらずんバ然ト云ども只戦闘の奇才ニして世主の器量なき人ゆへ讒（ザン）ニ逢シ後奥刕ニ蹲（ウヅクマリ）て一生を終シニて其量を知べし義貞ハ生

質正直の勇将也然レども時勢にうとき人ニ只運に乗して兵を起シ一挙に高時を討て無双の功ありト云ども時勢の取まハしうとかりし故君寵官禄共に却て無功の足利家に不及シ也因て不和生シて終に戦に及へども是又不働にして諸侯を得さりし故孤立の将ト成て戦負なり是皆不才にして足利家に計ラレあれバ惜ムへし〳〵信玄謙信ハ各名将にして後世大将なる人の手本ト可為人々也只恨クハ時を悪クし生出て互角の両雄並立シ故互に力を陳ル事不能して各一國に業を終シ人なれども其軍術ハ可貴可法織田氏ハ抜群の英雄にして向（ムカウ）處敵なく終に室町家を襲（オソウ）て天下に會王なり然リト云ども至剛を恃て間暴戻卒尓れ行ひありし故諸将心服せざれバ其業、半にして明智が為に弑せらる是威あれども徳無キ故也正成ハ元来大将ノ志気ありト云ども生質、信義に縛（バク）せらるゝ故、既に天下亂離の

成就一作醸成

機を知なかりし新田、足利の両将を超過して己レ糾合の才を施ス事不能、居なかりし大勲を成就して身終に討死ス進退是谷の時勢いハ云なかりし今を以て是を見レハ、其討死甚詮無に似たり、只子孫三代四十余ケ年、本國を不失して南朝を輔佐仕奉レハ、実に正成の遺徳にして楠家の大勲功なるへし清正ハ寛猛相兼て至誠至剛にして人能信服し人能恐怖ス信あり威有、智謀有、攻レバ必抜、戦バ必勝、能天稟の質朴に任せて時俗れ共猶未不與故治平の世態に於てハ徒角の名なれども乱世に於てハ真に英雄ト云べき者ハ大閤微賤より起て忽チ海内を掌握し天下を使令すれども世に是を間然する人なし海を絶て朝鮮を陥レ唐山を震ス其猛威ハ和漢の一人也惜哉攻伐之勉徳恵之不施且不学我慢にして治國安民に心を寄玉ハず閭市婦人の言を容ル此故に逝去以来天下怨チ

神祖ニ皈セリ

神祖武徳ヲ施テ天下ヲ一統為玉フの業神妙ニシテ今ニ至ル迄二百年来四境心服シテ干戈不興遠邦来賓ス実ニ開闢以来一人ハ此治ヲ推及サレバ萬々世ニ天地ト共ニ長久なるへし

○昇平久キ時ハ必華靡ヲ生ス華靡盛ナル時ハ諸侯士大夫貧窮ス貧窮セバ時ハ武備も名のミ存シて実用なきニ至ル竊ニ憶フ當世若クハ華靡盛なりといふへきも都て此條ニ意味深キ物語なれハ世ニ憚ル故茲ニ不筆此下僅ニ経済ハ大畧ヲ云のミ細ニ工夫ヲ可加

抑國家ヲ経済セバの要九ツなり食貨、礼式、学政、武備、制度、法令、官職、地理、章服ハ夫レ人食無レバ死シ食貨無レバ物ヲ通スル事不能此故ニ食貨ヲ経済の第一トせバ事ハ既ニ食（クラフ）テ礼式なけれバ人倫不明シて開闢の當坐の人ハ如シ此故ニ礼式ヲ立て人倫ヲ明ニシ以扱人の道立ても不学バ智発ツ事なし此故ニ学問ヲ勧

以て智ヲ開カ志む此三ツハ人を取立ル肝要
の法ハ武備ハ軍陣の用意を不忘して太平の
世ニも治兵、操練かゝて人馬ニ戦法をも教
又武器をも不取捨、制作修復する事ハ制度ハ
事物ニ定式ありて天子の事物ハ天子の事物
諸侯大夫士庶人の事物ハ諸侯大夫士庶人の
事物ト段々ニ定式あるを云是尊卑を分チ上
下を明カニする道ニして且奢を防クの術ハ
法令ハ掟を立置テ其掟ニ不従者を仕置し觸
流ス教令の廢レざる採ニ為ル事ニて一人を
懲（コラ）シて千万人ヲ正ス術ハ官職ハ天下中の事
一人ニて世話やかるゝ者ニあらさる故諸の
役目を立人ゝの器量を撰て夫ゝの職を授ケ
て一色ずゝ世話致サせる事ハ地理ニハ國の
寒、暖、地ノ厚薄、山澤、河海、高下、卑湿の差別ヲ細
ニ察して寒、暖厚薄山澤河海高下卑湿の利を
不失、尺土も空以措置ざるハ採ニ夫ゝの手あて
を為（ナシ）て地の利を盡ス事ハ章服ハ尊卑の冠冕

衣服ニ夫〻の色分ケ、大小等有テ姿ヲ見テ貴賤高下の人品ヲ知、混乱無礼の出来セザル様ニ講ずる法ハ、此九ツヲ経済の大趣意ニ又各一條毎ニ説有ト云ども言長ケれバ不筆、但シ推廣メテ言時ハ経済ハ武備ノ根本、武備ハ経済の輔佐なりト合点すべし。本より経済の仕形ニも軍法ノ立派ニも伝授ト云も無事也。只書ヲ讀テ和漢榮衰、古今興廢ノ損益得失ヲ見テ自知ル、故ニ論語ニ経済の事ヲ述テ所損益可知ト言ヒ、史記ニ兵ノ事ヲ言テ霍去病ガ顧ニ方畧如何耳不至學ニ古兵法ト云ハ其道ニ通セリト云べき也、然ながら唐山ハ其人性、甚柔鈍也、故ニ先王聖人ノ兵法ト云ども理ハ精密ニして事ハ拙キ事ども有り、然ル故ニ唐虞以来三千年ノ間北胡ニ襲ヒ苦メられて明の末ニ至て終ニ韃靼ニ合セられて頭髪ヲ剃ラレ衣服ヲ替られたり、是軍理而已ヲ貴て戦弱き故也、都て軍理而已ニ泥ムハ戦ハ弱クなる基なれ

ハ小子カ大ニ忌嫌フ所之今も軍学を好める人必唐山流の軍理而已ニ陥ル事勿レ亦日本諸流の軍書ハ大半事（コト）不足ニして軍事而已モ全ク不調ニ似タリ然ルを況や文武兼備の事ニ於てや然ル時ハ柱ニ膠したる如ク一流而已ニ泥ムをハ拙トもべし右ニも言シ如ク和漢及ヒ和蘭等の軍書ヲ取交ヘ文武相兼て工夫を加ヘ能軍情を會得シ器械をも制作シ其上ニ能操練を致べし然ルニ操練而已ニ泥メハ亦又

唐山流ニ陥て戦の餒弱クなる事有、心得あるべし何レニも戦闘の態を上手ニ為ルハ操練ニより士卒の心気を漁クせなから今日の政ニあり能彼是の弦を斟酌して自ラ極ル所ニ至ルべし是を兵の心印ト云大尾時

天明六年丙午夏

仙臺　林子平藏版

寛政三年辛亥四月板刻成

彫工　仙臺　石田榮助藤原成壽

筆者　同藩　鎌田佐吉藤原朝隆

海國兵談第十六巻終

予嚮ニ三國通覧を著ス其書也日本の三隣国、朝鮮、琉球、蝦夷の地図を明せり其意、日本の雄士、兵を任フて此三国江入ル事有ン时此図を諳（ソラ）ンじて應変せよト之、亦此海国兵談ハ彼ノ三隣国及ビ唐山（カラ）莫斯歌未亜（ムスコウビヤ）等の諸外国より海寇の来ル事有ン时、防禦に𠫓き術を詳悉せり兹ニ於て始て　本邦内外の武術調へりト言𠫓し是予小子徳を不計、然を不量して終身。　本邦の武備を不」忘所ゝ扱其

為書、水戦の一篇のミ精詳を盡せり、其余篇は只其大較を言のミ、些細は即其者流ニ讓て不云言、倪ラ此書を讀者は文武共大畧を知、故、太平此日ニは廊廟ニ居て王者の治を成ニ足、乱は為時は戎車ニ駕して征伐ニ當し、亦小ニしては人ゝ武ト儉トの道を會得して其分を守ル故、貧を治し財足て日用不乏、武用不」溺ゝ是此書の當世ニ益ある所之弦ルニ今哉學政久ク廢トなる故、世人多くは偏武ニ化して只武藝は而已、此俗習なキ故此書、文武の意味を俗語ニ述、書けるニ国字を以てストト云、ども書冊ト成ぬれど俗情躬ラ及ビ難キ事ニ思て見人少之邂逅ニ讀人あれど即言フ此書也善なる事は善なる歟し只按じ過なる書ニして當世ニ遠し思へど人間一生六十年之我一代さへ無事なれど後は唐ト成とも天竺ト成とも天ニ有りん歟しト言ル悟リ抜なる言の根なれバ此言也惰弱ニして不忠不義の日本一

なるべし且又俗情の通病にして位貴ければ
貧賤をあなどる事土芥の如し然も賤者此能
を忌悪て彼（カレ）匹夫に何ぞ大事を可知などト嘲
ルも多し是等の通病百人にして百人同一轍
也是即當世の人物諺に云ル儇児（サルリコン）或ハ自慢（ウヌボレ）に
て物知顔（モノシリカホ）故徳を不計慎を不知妄りに孟浪の
言を發るのミ妄りに孟浪の言を發して慙（ハヂ）
を不顧人是を何トカ云ン人々是を思へ扱亦
小子如此辞るもあるも世人ト衡を争フにも
あらざれば推て戯慢を卒ントにも動からば只見し
人をして當世後世に論なく能熟読翫味して
備字の於前ト節倹の一端トを發キ漸くに文
武両全の趣意を了知せしめて海国の用に可
備事を願フ耳へ此故に小子此趣の世人此耳
に入易カラン事を希フて敢て卑賤を忘レ究
困を不顧して言を當世に笆フるのミ扱自
負にもあらば狂言にもあらざれども既に首
巻に述し如ク　日本の武備を記したる書

ニ此兵談の如ク躬ラ異邦の人ハ面接シ遠ク
異国蛮夷ノ軍情を知新タニ奇計妙策を盡シ
海陸全備の眞味を述シ者ハ無之也。實ニ開闢
以来未曾有ノ發明ニて只読人小子が貧賤ニく
して直言スル事を咎ル事なく良薬の口ハ苦キ
を思ひ合せて一向ニ熟読翫味せず上下大小
各其分ニ應シ文武ノ大意を會得して貧を治
シ財足て武を張べし是今日ニ益有て海国ニ
備ル所以ノ大空ハして徒ニ唐山の書ニ本ヅ
キ空ク軍理而已を講スル者流と同日の議ニ
非ズト言べし只返ス〳〵も見人熟讀翫味せ
よ

林子平自跋

110X
159
3